論文

「肥後守様本陣備へ人名人数表」についての考察

白　峰　　旬

はじめに

『松井文庫所蔵古文書調査報告書』2 [1] に「加藤清正備陣立表」という表題で、陣立書が収載されている。この肥後加藤家の陣立書が松井家に伝来した由来はよくわからないが、加藤家の旧臣が所持していて、その後、松井家に仕えたというケースも想定できる。

この陣立書は、第一紙～第八紙にわたる長大なものであり、年次の記載はなく、本陣に該当する箇所には「肥後守」と記載されている。ただし、後述するように、この陣立書の内容から、この「肥後守」は加藤清正には比定できないので、「加藤清正備陣立表」という表題については再検討が必要である。よって、本稿では、この陣立書の「端裏貼紙」に記されている「肥後守様本陣備へ人名人数表」（以下、「肥後守陣立書」と略称する）という表題を、本稿のタイトルに使用することとした。

陣立書の定義について、高木昭作氏は「戦いのために軍隊の配置や編成を概念的に記した文書。豊臣秀吉のころから江戸時代にかけて作成された。いつでも合戦（遭遇戦）に移行できるよう編成された陣押（行軍）の順に書かれていることが多い。総勢の規模にもよるが、独立した戦闘単位である手を先陣（先備）、本陣、後陣（後備）などに配置し、備や手の大将と人数などを図式的に記している。」[2] としている。

陣立書についての論文としては、三鬼清一郎氏の先駆的な研究業績としての論文「陣立書の成立をめぐって」（以下、三鬼論文と略称する）[3] がある。

三鬼論文では、①「陣立書とは、特定の合戦を想定し、そのために自己の軍勢を最も効果的に配置したもので、制定者の花押または印章が据えられているのが通例である」、②「天正十二年の小牧・長久手の戦いは（中略）自己の勢力を最も効果的に配置するなかで、陣立書という文書様式が成立したものと思われる」、③「それ以後の九州・小田原陣や朝鮮出兵の際には、発向の日限を定めたものもみられる。いずれも具体的な戦闘を想定して作成されたもので、その戦闘の局面に関してのみ効力を有するものと思われる」、という点が指摘されている。

そのほか、関ヶ原の戦いに関する陣立書の論考として、拙稿「関ヶ原の戦いの陣立書（「大関家文書」）について」[4] がある。

本稿では、肥後加藤家の分限帳をもとにその軍事編制について検討したうえで、上述した「肥後守陣立書」の記載内容について考察する。

1. 肥後加藤家の軍事編制

まず、加藤家の分限帳をもとにその軍事編制について検討する。加藤家の分限帳は、管見では、以下の５種を確認できる[5]。

（１）「加藤家御侍帳」[6]（以下、分限帳Ａと略称する）

（２）「加藤侯分限帳」[7]（以下、分限帳Ｂと略称する）

（３）「加藤肥後守家中人持馬廻小姓歩之者鷹匠方諸職人知行取切米取人数帳」[8]（以下、分限帳Ｃと略称する）

（４）「加藤清正侍帳」[9]（以下、分限帳Ｄと略称する）

（５）「加藤清正公家中附」[10]（以下、分限帳Ｅと略称する）

上記の５種の分限帳のうち、年次の記載があるのは分限帳Ａと分限帳Ｃであり、ともに元和８年（1622）の年次の記載がある。

上記の５種の分限帳について、その内容をもとにグループ分けをすると、分限帳Ａと分限帳Ｅは同類（分限帳Ａ、分限帳Ｅともに馬廻小姓組を20組編制とする。弓についての記載があるのは分限帳Ａと分限帳Ｅだけである。）、分限帳Ｂと分限帳Ｃは同類（分限帳Ｂ、分限帳Ｃはともに「一番手」、「二番手」、「三番手」と記載し、分限帳Ａ、分限帳Ｄ、分限帳Ｅのように「一番」、「二番」、「三番」と記載していない。また、分限帳Ａ、分限帳Ｄ、分限帳Ｅは「一番」を分限帳の先頭に載せているが、分限帳Ｂ、分限帳Ｃは「一番手」を分限帳の先頭には載せていない。「後備」の記載があるのは分限帳Ｂ、分限帳Ｃだけである。「忍之者」ではなく、「忍衆」と記載しているのは分限帳Ｂ、分限帳Ｃだけである。）と見なすことができる。

分限帳Ｄは、内容的に、その他の分限帳とは異質である。具体的には、「加藤右馬允」の右側に「八代城代」、「加藤與左衛門」の右側に「薩摩堺佐敷城代」の記載があるが、この記載は他の分限帳には見られない記載である。ちなみに、佐敷城は元和一国一城令により、元和元年（1615）に廃城になっている。

分限帳Ｄには、①上述したように、他の分限帳に記載がない「城代」の記載がある、②他の分限帳に記載がある「田寺久太夫後家」、「大木土佐母」[11]の記載がない、③分限帳Ａに「前中村将監預り」[12]、分限帳Ｃに「前中村将監預」、分限帳Ｂに「前将監預」（ただし、分限帳Ｂでは別の箇所の記載では「中村将監組」が馬廻組[13]の組頭として名前がある）となっているが、分限帳Ｄでは「中村将監」が1932石１斗５升で現役の家臣として名前がある、④後述するように、筑後田中家重臣で田中家改易（元和６年）後に加藤家に仕えたと思われる榎津加賀右衛門の名前が分限帳Ｄにはない、などの点から、分限帳Ｄは、元和８年（分限帳Ａ、分限帳Ｃ）より前の元和前期（＝元和４年～同７年頃[14]）であると考えられる[15]。

つまり、分限帳Ｄは、分限帳Ａ～分限帳Ｅの中で時代的に最も古いということになる。分限帳Ａ～分限帳Ｅには「二番」（或いは「二番手」）の箇所に「南條作十郎」（或いは「南條若狭守」）の名前の記載がある。「南條作十郎」（或いは「南條若狭守」）は、『寛政重修諸家譜』[16]によれば、実名は「南條宜政（よしまさ）」であり、加藤家に仕えたのは、大坂の陣後（南條宜政が加藤家に仕えた正確な年次は不明）であるので[17]、分限帳Ａ～分限帳Ｅは大坂の陣が終結した元和元年以後のものである。よって、分限帳Ａ～分限帳Ｅは加藤清正（慶長16年〔1611〕に死去）の時代のものではなく、加藤忠広の時代のものである。

また、元和４年（1618）の「牛方・馬方騒動」（肥後加藤家のお家騒動）の結果、召し放ちになった重臣の吉村橘左衛門[18]の名前が分限帳Ａ～分限帳Ｅにはない。よって、分限帳Ａ～分限帳Ｅは元和４年よりあとのものである。

分限帳Ａ～Ｅに記載された加藤家の軍事編制をまとめたものが表１である。表１を見ると、以下のように馬廻組関係の編制の違いが注目される。

馬廻小姓組…20 組（分限帳Ａ、分限帳Ｅ）→合計 20 組

馬廻組…12 組、大小姓組…6 組、小々姓組…2 組（分限帳Ｂ）→合計 20 組

馬廻組…12 組、大小姓組…8 組（分限帳Ｃ）→合計 20 組

馬廻組…15 組（そのうち、3 組は組頭がいない明組）、大小姓組…2 組（分限帳Ｄ）→合計 17 組

このような違いがあるということは、元和期の加藤家において、馬廻組関係の編制替えがたびたびおこなわれたことを示している。

後述するように、「肥後守陣立書」では馬廻組 12 組、大小姓組 6 組、小々姓組 2 組と記されているので、上記の分限帳Ｂの編制と一致する。よって、「肥後守陣立書」の作成時期は、分限帳Ｂの作成時期と同じ時代のものであったことになる。

上述したように、分限帳Ａ～Ｅの中で分限帳Ｄは時代的に最も古いと考えられるので、分限帳Ｄの作成年代と考えられる元和前期（元和４年～同７年頃）には、馬廻組 15 組、大小姓組 2 組の合計 17 組であった、と考えられる。

その後、元和８年の時点で馬廻組と大小姓組を統合して馬廻小姓組 20 組（3 組増やしたことになる）にしたが（分限帳Ａ、分限帳Ｅ）、一つのくくりとして馬廻小姓組 20 組というのは組数が多すぎたためなのか、同年の時点でまた馬廻組 12 組と大小姓組 8 組に分けた（分限帳Ｃ）、と考えられる。

さらに、その後、馬廻組 12 組はそのままにして、大小姓組 8 組を大小姓組 6 組と小々姓組 2 組に分けた（分限帳Ｂ）、と考えられる。

このように考えると、分限帳Ａ～Ｅの中で分限帳Ｂが時代的に最も新しいことになる。以上の馬廻組関係の変遷を〔想定Ａ〕としてまとめると以下のようになる。

〔想定Ａ〕

馬廻組 15 組 大小姓組 2 組	→	馬廻小姓組 20 組	→	馬廻組 12 組 大小姓組 8 組	→	馬廻組 12 組 大小姓組 6 組 小々姓組 2 組
元和前期 （分限帳Ｄ）		元和８年 （分限帳Ａ、Ｅ）		元和８年 （分限帳Ｃ）		（分限帳Ｂ）

このほか、上記の想定とは別の想定も可能である。つまり、分限帳Ｄの馬廻組 15 組、大小姓組 2 組から、馬廻組 15 組の中の明組 3 組を分離して馬廻組を 12 組とし、そのほかの組数を増やして、大小姓組 6 組、小々姓組 2 組にした（分限帳Ｂ）。その後、全 20 組をすべて馬廻小姓組として統合したが（分限帳Ａ、Ｅ）、一つのくくりとし

て馬廻小姓組20組というのは組数が多すぎたためなのか、元和8年の時点で、また馬廻組と大小姓組の2種編制に戻り、馬廻組12組と大小姓組8組になった（分限帳C）、という想定である。以上の馬廻組関係の変遷を〔想定B〕としてまとめると以下のようになる。

〔想定B〕

馬廻組15組 大小姓組2組	→	馬廻組12組 大小姓組6組 小々姓組2組	→	馬廻小姓組20組	→	馬廻組12組 大小姓組8組
元和前期 （分限帳D）		（分限帳B）		元和8年 （分限帳A、E）		元和8年 （分限帳C）

分限帳Bには、馬廻組頭の柴原将監、榎津加賀右衛門、中村将監、大小姓組頭の加藤主馬、蒔田右京のように、分限帳A、分限帳Cに名前がない者が載っているので、これらの者が時代的に古い人物であったため、分限帳A、分限帳Cに名前がないとすると、上記の〔想定B〕の方が想定としての可能性は高くなると考えられる。

上記の中で、中村将監の検討については上述したが、榎津加賀右衛門について検討すると、榎津加賀右衛門は筑後田中家の重臣であったので[19]、田中家の改易（元和6年）以後に加藤家に仕えたとすると、分限帳Dに榎津加賀右衛門の名前はないので、分限帳Dは元和6年（1620）以前の成立ということになる。分限帳A（粟生一郎右衛門組において榎津加賀右衛門は1000石）、分限帳E（栗生一郎右衛門組において騎馬として榎津加賀右衛門は1000石）、分限帳B（馬廻組の組頭として榎津加賀右衛門は1000石）には榎津加賀右衛門の名前はあるが、分限帳Cには榎津加賀右衛門の名前はない。

よって、元和8年の時点で榎津加賀右衛門は加藤家の家臣であったが（分限帳A）、同年に加藤家の家臣ではなくなった（分限帳C）、という推測ができる。ちなみに、「肥後守陣立書」には榎津加賀右衛門の名前はない。

なお、馬廻組と大小姓組の存在は、寛永9年（1632）の時点（寛永9年は加藤家が改易された年）でも史料的に確認できるので[20]、馬廻組と大小姓組は加藤家の改易時（寛永9年）までそのまま推移して存続したことになる（ただし、上記の〔想定A〕の場合、小々姓組が加藤家の改易時に存在していたのかどうかは不明）。

表1を見ると、分限帳A、分限帳D、分限帳Eには「一番」、「二番」、「三番」、分限帳B、分限帳Cには「一番手」、「二番手」、「三番手」の記載がある。分限帳A、分限帳D、分限帳Eでは「一番」、「二番」、「三番」が分限帳の最初に記載されているが、分限帳B、分限帳Cでは「一番手」、「二番手」、「三番手」は分限帳の最初には記載されていない。

「一番」、「二番」、「三番」は先手（先備）に該当するもので、「一番手」、「二番手」、「三番手」も同様である。「番手」は接尾語で「陣立で、並べられた隊伍の順序をいうのに用いる。先陣を一番手、二陣を二番手など」[21]とされるが、こうした使用例はもっと後の時代なので[22]、元和8年の時点で「一番手」、「二番手」、「三番手」（分限帳C）という記載には疑義があるが、もともと「一番」、「二番」、「三番」と記載されていたものが、後世、写本が作成される段階で「一番手」、「二番手」、「三番手」と書き替えられた可能性も考えられる。

「肥後守陣立書」の「一番」、「二番」、「三番」における各名前と分限帳A～分限帳Eの「一番」、「二番」、「三番」（或

いは「一番手」、「二番手」、「三番手」）における各名前は一致する（ただし、人名における多少の字句の違いがあるケースや以下のように名前がないケースもある）。

なお、分限帳Dの「一番」には「庄林隼人正」の名前がなく、「二番」では「斎藤伊豆守」ではなく「斎藤伊豆守息」（下線引用者）となっている。分限帳Eの「一番」には「井上大九郎」、「三宅角左衛門尉」の名前がない。

「一番」、「二番」、「三番」は先手（先備）に該当し、上述した馬廻組関係の記載と共に、戦いを想定した戦時編制が、そのまま分限帳に反映されている。この点は江戸時代初期の分限帳の時代的特徴と言える。

上述したように、「肥後守陣立書」の「一番」、「二番」、「三番」における名前と分限帳A～分限帳Eの「一番」、「二番」、「三番」（或いは「一番手」、「二番手」、「三番手」）における名前が一致することは、「肥後守陣立書」と分限帳A～分限帳Eが同時代のものであることを示している。そして、分限帳A～分限帳Eの作成時期の時代幅が限定的（それほど時代的に離れていない）であることを示している。

分限帳Aの「一番」、「二番」、「三番」、分限帳Bの「一番手」、「二番手」、「三番手」における騎馬、鉄炮の編制（数量）と「肥後守陣立書」の記載の比較検討については後述する。

表1を見ると、分限帳A、分限帳B、分限帳C、分限帳Eに「組迦」の記載がある（ちなみに、類似した記載として「備迦」の記載があるのは分限帳Bのみである）。「組迦」は「くみはずし」と読むと考えられる[23]。

分限帳Aでは「組迦」には、「加藤右馬允」（2万16石7斗5升、騎馬108人、鉄砲之者38人）、「加藤與左衛門」（6722石7斗4升、騎馬24人、鉄砲之者61人）、「加藤越後守」（3385石1斗5升、騎馬15人）など1000石以上の大身家臣が19人記載されている（ただし、19人のうち、1000石未満が2人いる）。このことから、「組迦」は、馬廻組関係や「一番」、「二番」、「三番」に組み入れられない大身家臣が「組迦」としてまとめられている、と考えられる。「組迦」は「肥後守陣立書」では「与迦」（後述するIに該当する）と記されている。

以上のように、加藤家の軍事編制は、先手（先備）に該当する「一番」、「二番」、「三番」、馬廻組関係の20組（分限帳A、分限帳B、分限帳C、分限帳Eは20組、分限帳Dは17組）、1000石以上の大身家臣による「組迦」が軍事編制の基本的組織であったことがわかる。

2.「肥後守陣立書」についての考察

前掲『松井文庫所蔵古文書調査報告書』2[24]から「加藤清正備陣立表」（本稿では「肥後守陣立書」と略称）を引用したものが図1である。「肥後守陣立書」（図1）における各名前に該当する各名前を分限帳A、分限帳Bからピックアップしてその石高等を記載したものが表2である。表2では「肥後守陣立書」の内容を便宜上、A～Kに分類した（図1にもA～Kの分類を表記した）。以下では、そのA～Kの分類に区分して考察する。

【A～C…「一番」～「三番」】

上述したように、表2を見ると、「肥後守陣立書」の「一番」、「二番」、「三番」における各名前と分限帳A、分限帳Bの「一番」、「二番」、「三番」における各名前は一致することがわかる。

「一番」、「二番」、「三番」では、鉄砲（＝鉄砲之者[25]）の人数は各名前の上に記載されていて、騎馬の騎馬数は各名前の下に記されている。

この記載位置は、戦場（戦闘形態）におけるそれぞれの位置をそのまま反映していると考えられる。つまり、前方に鉄砲隊が展開し、その次にそれぞれの指揮官クラス（騎馬クラス）の武士（「一番」、「二番」、「三番」に名前が記されている者＝それぞれ騎馬一騎とカウントする）が位置し（「一番」、「二番」、「三番」の中心には備頭（そなえがしら）の武士〔「一番」では并河志摩守、「二番」では斎藤伊豆守、「三番」では下川又左衛門尉〕が位置する）、その後に与力の騎馬隊が展開する、という位置関係である。

このように、騎馬と鉄炮の兵科別編成の具体的状況（具体的な編成のやり方）が「肥後守陣立書」から読み取れる点は重要である。なお、「一番」、「二番」、「三番」では、兵科としては騎馬と鉄炮のみであり、鑓、弓が全くない点には注意する必要がある。このことは「肥後守陣立書」の作成年代とも関係すると思われる（「肥後守陣立書」の作成年代についての検討は後述する）。

表2を見るとわかるように、鉄砲（＝鉄砲之者）の人数[26]と騎馬数は、分限帳A、分限帳Bにおけるそれぞれの数値と一致する（ケースによっては若干の例外はある）。「一番」、「二番」、「三番」では、すべての家臣が鉄砲（＝鉄砲之者）、騎馬を持っているわけではないことがわかる。表2における分限帳A、分限帳Bの箇所を見ると、鉄砲（＝鉄砲之者）、騎馬の有無は、家臣の石高の大小に比例するわけでもないようである。

「一番」、「二番」、「三番」では、それぞれの最後に鉄砲（＝鉄砲之者）の人数、騎馬数の合計が記載されている（表2参照）。騎馬数の合計のカウントのやり方については、表2においてその右側に記された騎馬数（騎馬〇〇騎）と名前が記されている者（＝それぞれ騎馬一騎としてカウントする）の合計値である。

「肥後守陣立書」における騎馬数、鉄炮数などを集計したものが表3である。表3を見ると、「一番」は鉄炮数310、騎馬数57、「二番」は鉄炮数235、騎馬数55、「三番」は鉄炮数90、騎馬数32であり、鉄炮数、騎馬数共に「一番」が最も多く、その次が「二番」、その次が「三番」という順になっている。これは、「一番」、「二番」、「三番」が先手（先備）に該当し、その中で最も先に敵の軍勢と激突して戦うのが「一番」であることを想定すると当然と言えよう。

上述したように、「一番」、「二番」、「三番」で兵科として存在するのは鉄炮と騎馬のみであるから、「一番」、「二番」、「三番」は鉄炮隊と騎馬隊の混成部隊ということになり、鉄炮数が騎馬数よりも多いのは（「一番」では鉄炮数は騎馬数の5.4倍〔小数点第二位を四捨五入。以下同じ〕、「二番」では4.3倍、「三番」では2.8倍である）、敵に対する攻撃力を重視したからと思われる。

戦う場合の想定としては、鉄炮隊の一斉掃射で敵を蹴散らして、そのあとから騎馬隊が機動力を発揮して突撃し白兵戦をおこなって敵を制圧する、という想定ができる[27]。

「一番」、「二番」、「三番」が同様に鉄炮隊と騎馬隊の混成部隊であることは、騎馬隊の機動力を活かしてタテに繰り返し攻撃して波状攻撃をしかけるケースや、ヨコに広がって（＝散開して）敵を包囲殲滅するケースが想定できる。このように見ると「一番」、「二番」、「三番」における鉄炮隊と騎馬隊のフォーメーションは極めて実戦に即した陣形と言えよう。

なお、「二番」に「南條作十郎」の名前があるので、上述したように、「南條作十郎」が加藤家に仕えたのは、大坂の陣後（加藤家に仕えた正確な年次は不明）であるので、「肥後守陣立書」は大坂の陣が終結した元和元年以後のものであることは明らかである。

【D…鉄炮隊（一部、弓隊）】

上述したように、A～C（＝「一番」～「三番」）が先手（先備）に該当するのに対して、D～Gは本陣（本備）に該当する。

Dは鉄炮隊であり（一部、弓隊がある）、騎馬は全くいない。「肥後守陣立書」におけるDの記載からすると、このように鉄炮隊を横一列に横隊として並べたと考えられる（弓隊が含まれるが、弓隊は中心部分に近い場所に位置するので鉄炮隊を援護する役割だったのであろうか）。

Dにおける鉄炮数の合計は378、弓数の合計は50であり（表3参照）、鉄炮数は弓数の7.6倍（小数点第二位を四捨五入）なので、Dは実質的には鉄炮隊と見なして差し支えなかろう。

このように投射兵器（鉄炮378、弓50）を横一列に並べて火力を集中させる一方で、騎馬が全くいない点（機動力がない点）を考慮すると、本陣（本備）の前方を守備する役割であった、と考えられる。

Dの鉄炮隊の編成の方法については、表2を見ると、分限帳Aでは馬廻小姓組の各組から、分限帳Bでは馬廻組、或いは、大小姓組の各組（各組名については表4を参照）から、鉄砲之者（分限帳Aでは鉄砲之者、分限帳Bでは御鉄炮衆）を麾下に持つ者を引き抜いて鉄炮隊を編成したことがわかる。

小々姓組が入っていないのは、分限帳Bを見るとわかるように、鉄砲之者を麾下に持つ者がいないからであろう。

分限帳Aでは柳田勘右衛門組（これは分限帳Aの馬廻小姓組の組名ではない〔表4参照〕）弓之者30人としているので（表2参照）、柳田勘右衛門は弓組の組頭であった、と考えられる。柳田勘右衛門は「肥後守陣立書」では「弓三十人」となっていて、分限帳Aの記載と弓之者の人数が一致する。

池内左太右衛門尉は「肥後守陣立書」では「同（鉄炮）四十人内弓弐十人」となっているが、それに関係する記載は分限帳A、分限帳Bにはない（表2参照）。

兵科別編成という意味では、Dは純粋に鉄砲隊だけで編成されている点、そして、その編成方法が具体的にわかる点は重要である。

Dの鉄炮人数に着目すると、20人、30人、40人、50人というように10人の倍数になっている事例がほとんどである。このように10人の倍数になっているのは、当時の鉄炮隊の運用単位（ユニット）と関係するのであろう。

樋口隆晴氏は「鉄砲足軽隊の一個隊で一〇～三〇人程度だったと考えられる。この程度の人数の組を複数集めて鉄炮衆を編成し、状況に合わせて分割ないし集中して運用したのであろう。」[28]と指摘し、その事例として「慶長期の福島正則侍分限帳の鉄炮頭の率いる人数は20人から50人である」[29]と指摘している。

なお、鉄炮人数が10人の倍数になっている事例は、A、B、C、E、G、H、Jにも見られる。その中で鉄炮人数が100人以上の事例は、Aの100人、120人、Jの100人（定番鉄炮）、100人（定番鉄炮）である。10人の倍数ではないが、Jの185人（新座（ママ）〔新参ヵ〕与）も100人以上に該当する。Aは先手（「一番」＝Aは先手〔先備〕の中でも先頭に位置する）、Jは後備（Jは後備の中でも最後尾に位置する）であるため、このように100人以上の鉄炮人数の事例を複数配置したと思われる。

【E…奉行グループ】

上述したように、D～Gは本陣（本備）に該当する。その中で、Eは奉行のみが位置しているので奉行グループと言える。これらの奉行（＝Eの奉行）は、分限帳Aでは馬廻小姓組、分限帳Bでは馬廻組に所属し、組頭が3人いる（谷崎伊織、山田太良右衛門尉、杉村弥三兵衛）。

各奉行の位置関係では、捽箱奉行の２人が最も外側に位置して対称形になっている。また、昇奉行の２人も中心部で対称形に位置している。

昇奉行は中心部に位置していることから、「肥後守」の本陣であることを示す昇と考えられる。昇奉行２人にはそれぞれ鉄炮（＝鉄砲之者）20人が付いているが、鉄炮数としては多くない。よって、本陣の昇を守るためのものと考えられる。

これらの奉行が関係する捽箱（はさみばこ）、甲（かぶと、或いは、よろい）、昇（のぼり）、鑓は、本陣に位置する「肥後守」の専用のものであると考えられる。鑓は、「肥後守陣立書」において、他には全くないことから、鑓は「肥後守」専用の鑓を形式的に帯同している（つまり、この場合の鑓は形式的存在と考えられる）、と見てよかろう。

よって、これらの奉行は、全軍を管轄する奉行ではなく、「肥後守」の専用のこれらを管理する奉行であると見なされる。

Ｅは、捽箱奉行、鑓奉行、昇奉行、甲奉行のそれぞれの本陣における立ち位置がわかる点で重要である。上述したように、Ｅの奉行は分限帳Ａでは馬廻小姓組、分限帳Ｂでは馬廻組に所属しているので騎馬[30]ということになる（ただし、表３におけるＥでは騎馬の数値を記入しなかった）。「肥後守陣立書」のＥにおいて「騎馬」という記載がない理由は不明である。

なお、分限帳Ａの馬廻小姓組の各組、分限帳Ｂの馬廻組の各組、大小姓組の各組、小々姓組の各組には「騎馬〇騎」（各組の記載の末尾）という記載はないが、分限帳Ｄの馬廻組の各組、大小姓組（２組のうち１組）には「騎馬〇騎」（各組の記載の末尾）という記載があり、分限帳Ｅの馬廻小姓組の各組には「騎馬〇人」（各組の記載の末尾）という記載がある（ただし、蠏江主膳組と久米半之允組は「右〇人」〔各組の記載の末尾〕という記載になっている）。

【Ｆ…母衣＋使番】

Ｆは「肥後守」の前方に位置し、「肥後守」の前衛（前方の警護）に該当する。母衣（ほろ）（９人）は中核に位置している。その両サイドに使番（つかいばん）（各７人）が位置している。よって、母衣と使番の位置関係や人数の配分は規則正しいことがわかる。母衣が中核に位置していることは、使番に比べて、「肥後守」の側近としての性格が強いことを示しているのかもしれない。

表２を見ると、母衣と使番の所属は、分限帳Ａではすべて馬廻小性組である。分限帳Ｂでは、母衣は９人中８人は大小姓組であり、１人のみ馬廻組であるので、母衣は大小姓組を中心に編成されたことがわかる。使番は、山岸久右衛門尉から蟹江七太夫までの７人は、大小姓組が６人、馬廻組が１人のみであり、下川平吉から林安太夫までの７人は、馬廻組が６人、大小姓組が１人のみである。よって、分限帳Ｂでは、使番は、馬廻組、大小姓組両方から編成されたことになる。

後述するように、Ｇ（＝「肥後守」の本陣）では馬廻組12組、大小性組６組、小々性組２組の合計20組をすべて投入しているので、それらの中で馬廻組、大小性組からＦに該当する者を引き抜いてＦを編成したことになる。

よって、Ｆでは「騎馬」という記載はないが、各名前がある箇所それぞれが騎馬１騎と見なしてよいと思われる（ただし、表３におけるＦでは騎馬の数値を記入しなかった）。「肥後守陣立書」のＦにおいて「騎馬」という記載がない理由は不明である。

【Ｇ…「肥後守」の本陣】

主君である「肥後守」が中心に位置するので、本来の意味での本陣である。「加藤平左衛門与」の鉄炮30人を除くと、すべて騎馬隊である。

「吉村次太夫与」（「与」＝組を意味する。以下同じ）～「谷崎伊織与」までは「同」、「栗生市良右衛門与」は「手廻」と記されている。しかし、表2を見ると、これらの組は分限帳Ｂでは馬廻組に所属するので、「手廻」は「馬廻」の誤記であると考えられる。よって、「同」は「馬廻」を指し、意味的に左から右に向かって「同」になっていると解釈すると「吉村次太夫与」～「谷崎伊織与」は馬廻組ということになる。

「梶原喜平次与」と「松下弥平次与」は、表2を見ると、この2つの組は分限帳Ｂでは大小姓組に所属している[31]。よって、上記と同様に、意味的に左から右に向かって「同」になっていると解釈すると「同」は「大小性」を指すことになる。よって、「梶原喜平次与」と「松下弥平次与」は、「長尾権佐与」と同様に大小性組ということになる。

「竹田善兵衛与」は「手廻」、「佐野弥五右衛門与」～「岩越惣右衛門与」は「同」と記されているが、表2を見ると、これらの組は、分限帳Ｂでは馬廻組に所属するので、「手廻」は「馬廻」の誤記であり、「同」は「馬廻」を指すことになる。

このように考定すると、小々性組2組[32]が中核（「肥後守」の両脇）に位置し、その両サイドに大小性組が各3組位置し、さらにその両サイドに馬廻組各6組が位置している。

このように、中央の「肥後守」を中心に、小々性組各1組、大小性組各3組、馬廻組各6組が対称形に規則正しく位置していることがわかる。

「吉村次太夫与」～「栗生市良右衛門与」までの騎馬数合計は116騎であり、「竹田善兵衛与」～「岩越惣右衛門与」までの騎馬数合計は115騎であるので、最も外側の両サイドの馬廻組各6組の各合計騎馬数はほぼ同数になっている。

「梶原喜平次与」～「長尾権佐与」までの騎馬数合計は72騎であり、「相田六左衛門与」～「久米彦之丞与」までの騎馬数合計は83騎であるので、両サイドの大小性組各3組の各合計騎馬数は近似した数値になっている。

「蟹江主膳与」は騎馬数が37騎であり、「加藤平左衛門与」と「久米半丞与」の合計の騎馬数は48騎であるので、「肥後守」の両脇に位置する各小々性組の各騎馬数は近似した数値になっている。

このように、左右にほぼ均等に同じ騎馬数を割り振っている点（つまり、騎馬数の各合計が近似した数値で対称形になっている）は、「肥後守」の本陣における騎馬編成のあり方として注目される。

上述したように、「二番」（＝Ｂ）に「南條作十郎」の名前があり、「南條作十郎」が加藤家に仕えたのは、大坂の陣後（加藤家に仕えた正確な年次は不明）であるので、「肥後守陣立書」は大坂の陣が終結した元和元年以後のものであることは明らかである。

よって、Ｇの「肥後守」は加藤清正ではなく、加藤忠広に比定すべきである。Ｇの「捧庵」（＝下津捧庵）は「肥後守」の直下に独立して記載されていて、騎馬数が記されていないので、右筆としての役割であると考えられる[33]。

Ｇの編成がＡ～Ｆの編成と異なる点は、組（分限帳Ａでは馬廻小姓組〔「加藤平左衛門与」は除く〕、分限帳Ｂでは馬廻組、大小姓組、小々姓組〔「加藤平左衛門与」は除く〕）そのものを投入している点である（表2参照）。

その理由としては、「肥後守」の本陣であるので、騎馬隊で「肥後守」を完璧に（徹底的に）護衛するため、組

そのものを投入した方が機動力を発揮できて、戦闘の際に「肥後守」を俊敏かつ完全にガードできるからと考えられる。

そして、Gにおける組名と表4の分限帳B、分限帳C（分限帳Cは分限帳Bにおける一部の組名を朱字で訂正し、小々姓組の記載を抹消して小々姓組の2組を大小姓組に編入している）における組名を比較すると、G（＝「肥後守」の本陣）では馬廻組12組、大小性組6組、小々性組2組の合計20組をすべて投入していることがわかる。

Gの騎馬数の合計は471騎であるので、圧倒的かつ大規模な数の騎馬隊で「肥後守」の本陣を編成し、「肥後守」を護衛したことがわかる。

なお、「加藤平左衛門与」の鉄炮30人は、「肥後守」の直近に位置しているので、「肥後守」を警護するためのものと思われる。

【GⅡ…Gの合計値＋D～Gの合計値】

GⅡはGの合計値とD～Gの合計値である。

Gの合計値は騎馬数の合計値である。大小性組6組、小々性組2組、馬廻組12組（上記と同様に「手廻」は「馬廻」の誤記であろう）、というように区分してそれぞれの騎馬数の合計値を記している。さらに「三口」（＝大小性組6組、小々性組2組、馬廻組12組）の合計値を記している。ただし、実際にそれぞれの合計値を計算すると、計算間違いがある（表2参照）。

大小性組6組、小々性組2組、馬廻組12組という編成は、分限帳Bと合致する（表1、表4参照）。分限帳Bの成立の年次は上述した〔想定B〕をもとに考えると、元和8年より少し前の年次が想定される。よって、この「肥後守陣立書」も同じくらいの年次に比定できる。

D～Gの合計値は、鉄炮と弓の合計値である。実際にそれぞれの合計値を計算すると、弓の合計値は正しいが、鉄炮の合計値は、計算間違いがある（表2参照）。

鉄炮（D～Gの実際の合計値448）と弓（D～Gの実際の合計値50）の数値を比較すると、鉄炮は弓の9.0倍（小数点第二位を四捨五入）であり、この頃（＝「肥後守陣立書」の成立年次に比定できる元和8年より少し前）には武器としての弓の使用頻度の低下と鉄炮が武器の主力になっていたことがわかる。

GⅡでD～Gの合計値を記しているということは、上述したように、D～Gが本陣（本備）に該当することによるものと思われる。

【H…後備①】

Hは、本陣（本備）の後方に位置する後備に該当する。後備はこのうしろも続くので、後備①とする。

Hは、加藤与左衛門尉（＝加藤重次）と加藤右馬允（＝加藤正方）の重臣（大身家臣）2人で編成されている。加藤与左衛門尉は元・佐敷城代（佐敷城は元和一国一城令で廃城）であり、分限帳Aでは6722石7斗4升、分限帳Bでは6721石である。所属は分限帳Aでは組迦、分限帳Bでは備迦である。鉄炮30人、騎馬24騎は分限帳Bと一致する（表2参照）。

加藤右馬允は八代城代であり、分限帳A、分限帳Bでは2万16石である。所属は分限帳Aでは組迦、分限帳Bでは備迦である。鉄炮38人、騎馬108騎は分限帳A、分限帳Bと一致する（表2参照）。Hの騎馬数の合計は132、鉄炮数の合計は68であり（表3参照）、騎馬の方が多いので機動力を重視していることになる（「肥後守」

を後方から警護するためであろう）。Hは騎馬隊と鉄炮隊の混成部隊であり、その点は、上述した「一番」、「二番」、「三番」と同様である。

【Ｉ…後備②】

Ｈ（後備①）のうしろに位置するのがＩ（後備②）である。Ｉ＝「与迦」（＝組迦〔くみはずし〕）の全員が、所属が分限帳Ａでは組迦になっていて一致する。分限帳Ｂでは後備になっている（表２参照）。

「与迦」（＝Ｉ）は、石高の分布を見ると、3000 石クラスが３人、2000 石クラスが２人、1000 石クラスが８人、1000 石未満が１人である（表２参照）。よって、1000 石未満の１人を除いて、全員が 1000 石以上の大身家臣である。

騎馬数の合計は 42 騎であり（表３参照）、Hの騎馬数の合計（132）よりも少ない（半分以下）。鉄炮隊は全くいない。

【Ｊ…後備③】

Ｉ（後備②）のうしろ、つまり最後尾に位置するのがＪ（後備③）である。「前長野三良左衛門与力」から「前津田兵部少与力」までは騎馬である（騎馬の合計は 45 騎）。ただし、鉄炮 29 人は前長野三良左衛門与力に入っている。

「前長野三良左衛門与力」から「前津田兵部少与力」までの記載は、そのままの順番で分限帳Ａに記載されている[34]。この中で、三田村七兵衛以外は現役の家臣としては分限帳Ａに記載がなく、田寺久太夫については分限帳Ａには「田寺久太夫後家」と記載されているので、「前」というのは、この時点で現役の家臣ではないこと（この時点で死去している、など）を意味している、と考えられる（三田村七兵衛は除く）。それらの与力（＝騎馬）がそのままの形で残されたということであろう（騎馬数については、「前田寺久太夫与力」以外は分限帳Ａと一致する〔表２参照〕）。そのため最後尾のＪ（後備③）にまわされたと考えられる。

「頭」の意味については不明であるが、「頭」（かしら）を含めて何騎という意味であろうか。

「前大脇次良左衛門預り」[35]から「前中村将監預り」までの記載は鉄炮の人数である（鉄炮の合計人数は 122 人）。「前大脇次良左衛門預り」から「前中村将監預り」までの記載は、分限帳Ａに記載があり（ただし、「前大脇次良左衛門」と「前毛利勘左衛門」は「預り」ではなく「与（力脱ヵ）」と記載されている[36]）、鉄炮の人数も一致する（表２参照）。「預り」というのは加藤家が預かっている（つまり、加藤家の直属）、という意味かもしれない。

これらの「前」というのも、分限帳Ａには現役の家臣としては記載がないので、この時点で現役の家臣ではないことを意味している、と考えられる。

このあとの記載は、この時点で現役の家臣に関するものである。「佐藤孫右衛門尉」と「奥井与三左衛門尉」は両名合わせて鉄炮 20 人と記載されている。この両名は、分限帳Ａでは馬廻小性組であるが、分限帳Ａには鉄炮人数に関する記載はない（表２参照）。

「新座（ママ）（新参ヵ）与」の鉄炮 185 人は、分限帳Ａの「新参与」の「鉄砲之者」185 人と一致する（表２参照）。「新座（ママ）（新参ヵ）与」とは鉄砲組の組名なのであろう。

「美濃部喜兵衛」の「定番鉄炮」100 人と「四宮藤五郎」の「定番鉄炮」100 人は、人数については分限帳Ａと一致する（表２参照）。分限帳Ａでは「美部（ママ）（美濃部ヵ）喜兵衛与」、「四宮藤五郎与」と記載されているので、美濃部喜兵衛と四宮藤五郎がそれぞれ組頭を務める鉄砲組という意味であろう。「定番鉄炮」というのは、人数が各 100 人というように端数がないことや「定番」（じょうばん）という表記を考慮すると、加藤家直属の鉄砲組と考えられる。上述した「新座（ママ）（新参ヵ）与」も人数（きりのよい数字なので）からすると加藤家直属の鉄砲組なの

かもしれない。

これら（「佐藤孫右衛門尉」～「四宮藤五郎」）の鉄砲人数を合計すると405人になる。

「忍之者」の「頭三拾人」は「頭」（かしら）を含めて30人という意味かもしれない。分限帳Ａでは「忍の者」33人、分限帳Ｂでは「忍衆」30人分と記載されているので（表2参照）、人数としては分限帳Ｂと一致する。

このように、Ｊ（後備③）は鉄炮隊と騎馬隊の混成部隊に「忍之者」を加えたものである。鉄砲の人数の方が、騎馬の数より圧倒的に多い（騎馬45、鉄炮556〔表3参照〕）のは、最後尾なので後方からの敵の攻撃を警戒していることによるのかもしれない。「忍之者」がいるのは、Ａ～Ｋでは、このＪとＫのみであり、最後尾なので後方からの敵の攻撃に対する探索部隊という意味があるのかもしれない。「忍之者」は加藤家の直属と考えられること、上述したように現役の家臣でないと考えられる家臣名が列挙して記載されていること、「定番鉄炮」の2組は加藤家直属の鉄砲組と考えられること、などを考慮すると、Ｊ（後備③）は全体が加藤家直属である可能性が考えられる。

【Ｋ…Ａ～Ｊの合計値？など】

「一紙」というのは別紙という意味であろうか。騎馬の合計840騎、鉄炮の合計1672人、弓の合計86人というのは、Ａ～Ｊの合計値のように見えるが、実際には数値は一致しない（表3参照）。なお、鉄炮の人数と比較して弓の人数が圧倒的に少ない点に注意したい。

「歩侍」（かちざむらい）は、「肥後守陣立書」では初めて出てくる記載である。「外歩侍」（下線引用者）と記載されているので、上述したＡ～Ｊの合計値？とは別に「歩侍」の人数97人を記した、と考えられる。ただし、「歩侍」が置かれた位置は不明である。

騎馬の合計217騎は、Ｈに加藤右馬允と加藤与左衛門尉の「自身与力共」を加算した騎馬数と考えられる。Ｈの騎馬数の合計は132騎であるので（表3参照）、騎馬の合計217騎から差し引くと85騎になる。よって、加藤右馬允と加藤与左衛門尉の「自身与力共」の合計は85騎ということになる。

鉄炮の合計589人、弓の合計36人、忍之者33人は、Ｊの合計値のように見えるが、実際には数値は一致しない（表3参照）。

「歩侍」は上述したＪの合計値？とは別に「歩侍」の人数97人を記載したと考えられる。よって、上述したＡ～Ｊの合計値？に加算した「歩侍」97人と、このＪの合計値？に加算した「歩侍」97人は、同じ「歩侍」97人である可能性が考えられる。

おわりに

「肥後守陣立書」における「肥後守」は、上述したように、加藤忠広に比定できる。そして、上述したように、「肥後守陣立書」における大小性組6組、小々性組2組、馬廻組12組という編成（ＧⅡ）は、分限帳Ｂと合致するので（表1、表4参照）、分限帳Ｂの年次の想定（元和8年より少し前）と同じくらいの年次に比定できる。

その点を前提として、「肥後守陣立書」の性格や内容について、マクロ的視点から考えてみたい。

【「肥後守陣立書」における備の編制（構成）】

Ａ～Ｃは先備、Ｄ～Ｇは本陣、Ｈ～Ｊは後備と見なされる。先備は「一番」（Ａ）～「三番」（Ｃ）であり、そ

れぞれ前列が鉄炮隊、後列が騎馬隊である（鉄炮隊と騎馬隊の混成部隊）。この構成は、戦いの際に鉄炮隊で敵の軍勢を蹴散らして、そのあと、騎馬隊が突入する、と想定できる（陣立書は二次元の記載〔平面上の記載〕であるが、前方に敵の軍勢がいるという立体的な三次元の想定で読み取るべきであろう）。

よって、「一番」（A）～「三番」（C）は鉄炮隊と騎馬隊の混成部隊であるが、鉄炮、騎馬ともに人数はバラバラであり、これを統一した編制と見なせるのかどうか、という問題があるが、この点については後述する。

「一番」～「三番」の鉄炮人数・騎馬数を比較すると、鉄炮人数、騎馬数ともに最も多いのが「一番」であり、その次が「二番」、その次が「三番」である（表3参照）。「一番」は、敵の軍勢と真っ先に激突することになるので、敵の軍勢を突破する、という意味では、「一番」～「三番」の中で鉄炮人数・騎馬数ともに最も多い、という点は首肯できる。

なお、上述したように、「一番」～「三番」における各名前と分限帳A～分限帳Eの「一番」～「三番」における各名前は一致するので、陣立書の編制と分限帳の編制が一致するということは、江戸時代初期（元和期）の分限帳は、家臣の軍事編制（備）をそのまま載せていたということになる。

本陣（D）は鉄炮隊（鉄炮人数378）であり（一部、弓隊）、鉄炮人数としてはA～Jの中では、後備（J）の鉄炮人数556の次に多い（表3参照）。

本陣（D）は本陣（G）の「肥後守」（＝加藤忠広）の前衛に位置しているので、「肥後守」（＝加藤忠広）を守る部隊、という性格と思われる。ただし、鉄炮隊（一部、弓隊）である本陣（D）も、鉄炮人数はバラバラである。

本陣（F）は、母衣と使番で編成されているが（母衣が中央、その両サイドに使番が位置する）、本陣であることを考えれば当然の構成である。この母衣と使番が徒歩衆であるのか、或いは、騎馬であるのか、という点は、本陣（F）に「騎馬」の記載がないため判断に迷うが、母衣と使番のメンバーは、分限帳Aでは馬廻小性組に属し、分限帳Bでは大小姓組、或いは、馬廻組に属しているので（表2参照）、上述したように騎馬と見なした（ただし、表3におけるFでは騎馬の数値を記入しなかった）。

本陣（G）は、「肥後守」（＝加藤忠広）が位置するので、本陣の中核である。鉄炮人数30人を除くと、ほかはすべて騎馬であり（つまり騎馬隊）、その騎馬数471はA～Jの中で最大の騎馬数である（表3参照）。これは、最大の機動力（騎馬による機動力）で「肥後守」（＝加藤忠広）を護衛するとともに、戦局の流れによっては、「肥後守」（＝加藤忠広）を護衛して迅速に他の場所に動く（桶狭間の戦いや沖田畷の戦いのように、敵に本陣を突かれることを避ける）、という意味であろう。

後備（J）の鉄炮人数556は、A～Jでは最大の鉄炮人数である。これは最後尾なので後方からの敵の攻撃を警戒する意味とともに、鉄炮の予備隊的な意味があったのかもしれない。

【「肥後守陣立書」における騎馬、鉄炮、弓の数的偏差】

A～Jの合計を見ると、騎馬数844、鉄炮人数1707、弓50であり（表3参照）、鉄炮人数は騎馬数の2.0倍（小数点第二位を四捨五入）である。％にすると、騎馬32.4％、鉄炮65.6％、弓1.9％であり（小数点第二位を四捨五入）、弓はわずか1.9％であるので、弓を除くと、鉄炮と騎馬だけで編成されていることがわかる。しかも、％からすると、半分以上のウエイトを鉄炮が占めている。

これと同様の偏差（騎馬、鉄炮、弓の％比較）は、元和期に比定できる分限帳A、分限帳B、分限帳D、分限

帳Ｅでも確認できる（表５参照）。よって、元和期の加藤家では戦時（陣立書）だけでなく、平時（分限帳）でも鉄炮と騎馬だけで編成されている（弓については、次に述べるように存在意義はかなり低い）ことがわかる（騎馬は武器ではないので、武器としては鉄炮のみで編成されたことになる）。弓は分限帳Ａでは0.8%、分限帳Ｂ、分限帳Ｄでは0%、分限帳Ｅでは1.5%であるので、%の低さからすると、弓について編成上の存在意義はかなり低い（弓は主要武器としては脱落寸前であったと見なされる）。

陣立書、分限帳ともに鑓が皆無であるのは、「肥後守陣立書」と分限帳が元和期のものであることに起因すると思われる。

文禄３年（1594）５月６日付で加藤清正が家臣の吉村吉左衛門尉に対して出した軍役定[37]では、人数に応じて（石高を軍役賦課の基準にしていない点には注意する必要がある）、のぼり、鉄炮、鑓の数を軍役として賦課している（表６参照）。これを見ると、文禄３年の時点（朝鮮出兵に関係する軍役賦課か？）では、のぼり、鉄炮、鑓の３点セットが軍役賦課のフル装備であったが、加藤家では元和期には鑓は主要武器からは完全に脱落していた、と見なされる[38]。

【「肥後守陣立書」は何を目的として作成されたのか】

「肥後守陣立書」は何を目的として作成されたのであろうか。「肥後守陣立書」の記載内容が非常に具体的である点を考慮すると、何らかの架空のシミュレーションではなく、実際の軍事オプションを想定して作成されたと考えられる。

「肥後守陣立書」の作成年代としては、上述したように元和８年より少し前の時期と推定される。この時期に日本国内での軍事オプションが想定されるとすると、越前藩主・松平忠直の動向に対する将軍・徳川秀忠による諸大名を動員しての軍事オプションの可能性が想起される[39]。

「肥後守陣立書」は、秀忠から加藤忠広に対して戦時動員が下命されることを想定して、加藤家において作成された、と推測できる。

【統一した編制なのか】

上述したように、「肥後守陣立書」において、「一番」（Ａ）～「三番」（Ｃ）の鉄炮隊と騎馬隊において鉄炮、騎馬ともに人数はバラバラである。鉄砲隊（一部、弓隊）（Ｄ）においても鉄炮の人数はバラバラである。本陣（Ｇ）の騎馬隊においても騎馬の人数はバラバラである。

このようなバラバラの編制を統一した編制と見なせるのかどうか、という問題がある。また、そもそも論として、鉄炮や騎馬を兵科、或いは、兵種と見なせるのかどうか、という問題もある。さらに、鉄炮や騎馬を兵科と見るのが正しいのか、或いは、兵種と見るのが正しいのか、という問題もある。

備（そなえ）というのは、戦時において臨時に編制されるのであるから、封建的主従関係において、主君（大名）が家臣に対して軍役として賦課して鉄炮や騎馬を徴発した結果、徴発された鉄炮や騎馬の数値がバラバラになるのは当然の結果なのである。この点が近代の軍制との違いであるから、当時（封建時代）の鉄炮隊や騎馬隊を近代の軍制の整然としたイメージではとらえられないのである。

鈴木眞哉氏は、当時の騎馬について「中世的な騎馬兵が一定の資格を持った個人としての戦闘員である」としたうえで「騎馬武者は兵種とはいえない」と指摘している[40]。

鈴木氏はさらに「騎馬の兵士が戦術的な存在であるためには、定められた装備をし、共同生活をし、共通の訓練を経て、集団的な規律に服することが必要である。（中略）おそらくそうしたことは、どこの家でも行われていなかっただろう。」[41] と指摘している。

鈴木氏のこの指摘（「騎馬武者は兵種とはいえない」という指摘）は卓見であり首肯できるのだが、「肥後守陣立書」を見ると、鉄炮、騎馬ともに人数はバラバラであっても（つまり、近代軍制のような整然と統一した編制とは見なせないが）、それぞれの位置に鉄炮隊や騎馬隊のグルーピング（グループ分け）はできているため（前近代の封建制を反映した暫定的な編制ということになるのかもしれないが）、騎馬、鉄炮（弓も含む）というのは戦時には統一された運用がされたはずなので、戦いにおける運用面では騎馬、鉄炮（弓も含む）をそれぞれの兵科と見なして、本稿では（暫定的な見方として）兵科別編成として扱った（実態としては諸兵科部隊連携運用なのであろうが）。

なお、樋口隆晴氏は、備について「現在言うところの「諸兵種協同部隊」である」と指摘している[42]。

【その他…備の運用についての注意点】

陣立書は備の編制（構成）を示す史料であるが、加藤清正の時代には、実際の戦いでは、「備」の運用には「備中」の「置目法度」（＝備の構成メンバーが守るべき規則のことか？）と「陣取人数之出入」（＝その備が陣取をする時の人数の出入り〔ではいり〕の規則か？）が備頭に対して申し含める形（つまり口頭）で出された[43]。こうしたことは、戦時における備の実際の運用について注意すべき点である。

以上のように、「肥後守陣立書」は、元和期における加藤家の戦時編制（陣立）を具体的に知ることができる、という意味で貴重な史料であると評価できる。

今後は、他の大名家における陣立書との比較検討も必要と思われるが、その点については今後の課題としたい。

なお、マクロな意味では、当時（といっても戦国時代から江戸時代初期ではかなりの時代幅があるが）、兵科別編成が達成されていたのか（或いは、封建制のシステム上、〔その限界として〕暫定的な達成と見るのか）、達成されていなかったのか、兵科別編成が達成されていなかったとすると、諸兵科「連携」なのか、諸兵科「合同」なのか、諸兵科「協同」なのか、兵科や兵種という用語が適切なのか（兵科の方が兵種よりも広義の意味になるのかもしれないが）、適切とすれば兵科と兵種のどちらがよいのか、単なる兵科よりも戦闘に特化した戦闘兵科（騎馬隊、鉄炮隊など）という用語の方が適切なのか、など根本的な問題も存在するが、その点も今後の課題としておきたい。

［註］

（ 1 ）『松井文庫所蔵古文書調査報告書』2（八代市立博物館未来の森ミュージアム、1997 年、254 号文書、52 ～ 58 頁）。

（ 2 ）『日本史大事典』3 巻（平凡社、1993 年、1454 頁、「陣立書（じんだてしょ）」の項、この項の執筆は高木昭作氏）。

（ 3 ）三鬼清一郎「陣立書の成立をめぐって」（『名古屋大学文学部研究論集（史学）』38、名古屋大学文学部、1992 年）。

（ 4 ）拙稿「関ヶ原の戦いの陣立書（「大関家文書」）について」（『史学論叢』52 号、別府大学史学研究会、2022 年）。

（ 5 ）『肥後加藤侯分限帳』〈青潮社歴史選書 4〉（鈴木喬監修、山田康弘・高野和人編纂、青潮社、1987 年、77 ～ 82 頁）に収録されている分限帳「清正代侍略記」は記載内容が簡略であるため、本稿の検討対象からは除外した。

（ 6 ）前掲『肥後加藤侯分限帳』（83 ～ 147 頁）に収録。

（ 7 ）前掲『肥後加藤侯分限帳』（1 ～ 76 頁）に収録。

（ 8 ）上記「加藤侯分限帳」（分限帳Ｂ）を朱字で適宜訂正したもの。前掲『肥後加藤侯分限帳』に収録。

（ 9 ）『続群書類従』第二十五輯上（続群書類従完成会、1924 年発行、1959 年訂正三版発行、396 ～ 421 頁）に収録。

（１０）『肥後古記集覧』〈熊本市史関係資料集第 4 集〉（新熊本市史編纂委員会編集、熊本市発行、2000 年、442 ～ 466 頁）に収録。

（１１）大木土佐は慶長 16 年 6 月 24 日以後に殉死している（前掲『肥後加藤侯分限帳』の鈴木喬「序－「加藤家侍帳」解題をかねて－」）。

（１２）「肥後守陣立書」にも「前中村将監預り」の記載がある。

（１３）分限帳Ｂでは先頭に記載された 12 組についてその所属する組名として「馬廻組」という記載が本来、分限帳Ｂの冒頭に記載されているはずであるが脱漏していると思われる。よって、本稿では分限帳Ｂの先頭に記載された 12 組の所属する組名を「馬廻組」として扱うことにする。

（１４）分限帳Ａ～分限帳Ｅが元和 4 年よりあとのものである理由については後述する。

（１５）ただし、分限帳Ｄについては、「重臣連の石高はすべて元和加増後のものであり、これも時代的には元和末年の色彩が濃厚である」という指摘もある（前掲『肥後加藤侯分限帳』の鈴木喬「序－「加藤家侍帳」解題をかねて－」）。

（１６）『新訂寛政重修諸家譜』第二十（続群書類従完成会、1966 年、292 頁）。

（１７）前掲『新訂寛政重修諸家譜』第二十（292 頁）には「豊臣秀頼につかへ、大坂城にこもり（中略）後肥後国にいたり加藤肥後守清正につかへ（後略）」と記されているが、時代的に考えて、仕えたのは加藤清正ではなく、加藤忠広であることは明らかである。

（１８）福田千鶴「加藤忠廣の基礎的研究　附　飯田覚資料の翻刻・紹介」（『九州文化史研究所紀要』62 号、九州大学附属図書館付設記録資料館九州文化史資料部門、2019 年、68 頁）。

（１９）「田中家臣知行割帳」（中野等『筑後国主田中吉政・忠政』、柳川市史編集委員会編集、柳川市発行、2007 年、における史料編に収録）では、榎津加賀右衛門は 3260 石として記載されている（同書、328 頁）。

（２０）前掲・福田千鶴「加藤忠廣の基礎的研究　附　飯田覚資料の翻刻・紹介」の「附属史料　飯田覚資料の翻刻・紹介」における「20. 肥後熊本加藤家家臣書付（二九号）」（寛永 9 年）には「知行高四百石馬廻くみ頭　相田六左衛門」、「同高四百石大小性くみ頭　松下弥右衛門」の記載が確認できる。

（２１）『日本国語大辞典（第二版）』11 巻（小学館、2001 年、69 頁）の「番手（ばんて）」の項。

（２２）前掲『日本国語大辞典（第二版）』11 巻の「番手（ばんて）」の項の用例では『武家名目抄』（19 Ｃ中か）の用例を提示している。

（２３）「組迦」の読み方の参考として、国文学研究資料館の「国書データベース」によれば「組迦切米扶持方帳」（下線引用者）について「くみはずしきりまいふちかたちょう」（下線引用者）という読み方がある（https://

kokusho.nijl.ac.jp/work/002448922）。

（２４）前掲『松井文庫所蔵古文書調査報告書』2（254 号文書、52 ～ 58 頁）の「加藤清正備陣立表」（本稿では「肥後守陣立書」と略称）。

（２５）分限帳Ａでは「鉄砲之者」、分限帳Ｂでは「御鉄炮衆」或いは「鉄炮衆」と記されている（表 2 参照）。

（２６）鉄砲之者の人数と扶持の関係については、例えば、「飯田覚兵衛」は分限帳Ａでは、300 人扶持鉄砲之者 100 人となっている（表 2 参照）。この場合、鉄砲之者 1 人あたり 3 人扶持ということになり、この基準は分限帳Ａ、分限帳Ｂの同様の記載において多くの事例で当てはまる（ただし、そうでない事例も若干ある）。また、分限帳Ａでは「柳田勘右衛門與」（「與」＝組を意味する）90 人扶持弓之者 30 人となっていて、同様に、弓之者 1 人あたり 3 人扶持ということになる。

（２７）樋口隆晴氏は「足軽の鉄炮は、敵を制圧し、武士の突撃の機会を創り出すために用いられたのである」（樋口隆晴＝構成と文、渡辺信吾＝絵と解説『図解武器と甲冑』、ワン・パブリッシング、2020 年、100 頁）と指摘している。樋口氏からは、御高著の刊行時にわざわざ御高著を御恵送いただいたことに感謝する次第である。

（２８）前掲・樋口隆晴・渡辺信吾『図解武器と甲冑』（101 頁）。

（２９）前掲・樋口隆晴・渡辺信吾『図解武器と甲冑』（101 頁）。

（３０）「馬廻（うままわり）」とは「合戦の時（あるいは平時出行の際）、常に大将たる主人の周囲にあって護衛の任にあたり、全軍中の中核部分をなす騎馬の武士」（下線引用者）である（『国史大辞典』2 巻、吉川弘文館、1980 年、158 頁の「馬廻（うままわり）」の項、この項の執筆は佐藤堅一氏）。

（３１）「肥後守陣立書」では「大小姓」ではなく、「大小性」と記されている。

（３２）「肥後守陣立書」では、「加藤平左衛門与」（「与」＝組を意味する）と「久米半丞与」の上に両組を結ぶ線が記されていて、その上に「小ょ性」と記されているので、この 2 つの組を合わせて 1 つの「小ょ性」組と見なしている、と考えられる。

（３３）「祖秀（引用者注：久我祖秀）ははじめ鹿苑寺に住し、のち加藤清正に仕えて下津棒庵と号した」（『国史大辞典』11 巻、吉川弘文館、1990 年、841 頁の「東久世家（ひがしくぜけ）」の項、この項の執筆は川田貞夫氏）という履歴からすると右筆としての役割であると考えられる。

（３４）前掲『肥後加藤侯分限帳』（106 ～ 111 頁）。

（３５）「前大脇次良左衛門預り」については、「弓歟鉄炮三拾六人」と記載されているが、分限帳Ａでは「同（引用者注：鉄砲之者）参拾六人」と記載されているので（表 2 参照）、鉄炮としてカウントした。

（３６）前掲『肥後加藤侯分限帳』（111 頁）。

（３７）「吉村文書」（校訂・解説・花岡興輝「熊本県史料・中世篇・補遺（一）」、『熊本史学』40 号、熊本史学会、1972 年、1 号文書、47 ～ 48 頁）。

（３８）鈴木眞哉『戦国合戦のリアル』〈ＰＨＰ文庫〉（株式会社ＰＨＰ研究所、2021 年、111、114 頁）では「鉄砲兵の比率が明らかに上昇するのは、関ヶ原の戦い（一六〇〇）の頃からである」、「関ヶ原の戦い（一六〇〇）の頃になると、鉄砲兵の比率が上がるのと裏腹に槍兵は相対的に減少し始める」と指摘されている。鈴木

氏からは、御高著の刊行時にわざわざ御高著を御恵送いただいたことに感謝する次第である。

（３９）前掲・福田千鶴「加藤忠廣の基礎的研究　附　飯田覚資料の翻刻・紹介」（50 頁）では「十月（引用者注：元和６年）になると忠廣ら西国大名は江戸に召喚された（『細川家史料』）。理由は伝わらないが、おそらく松平忠直（越前北の庄）の動向に備えるためであった。」と指摘されている。

（４０）前掲・鈴木眞哉『戦国合戦のリアル』（91 ～ 92 頁）。

（４１）前掲・鈴木眞哉『戦国合戦のリアル』（92 頁）。

（４２）前掲・樋口隆晴・渡辺信吾『図解武器と甲冑』（92 頁）。

（４３）「慶長五年九月十三日付加藤清正陣取人数定」、「慶長五年十一月朔日付加藤清正陣取定」（前掲・「吉村文書」、『熊本史学』40 号、15 号文書、19 号文書、54 ～ 57 頁）。前者は加藤清正が熊本を出陣する２日前にあたり（拙稿「慶長５年の九州における黒田如水・加藤清正の軍事行動（攻城戦と城受け取り）について－関ヶ原の戦いに関する私戦復活の事例研究（その２）－」、『史学論叢』41 号、別府大学史学研究会、2011 年、表２参照）、その後、途中で熊本へ引き返した時のものと思われる。吉村橘左衛門尉が「三番」の備頭なのでこの文書が加藤清正から発給されたと思われる。よって、ほかの「備」の備頭に対しては、それぞれ同様の文書が加藤清正から発給されたのであろう。なお、この文書に宛所の記載はないが、その理由は公布したものだからであろう。後者は、黒田如水と加藤清正による薩摩（島津氏）への出陣予定（その後中止）の時のものと思われる。吉村橘左衛門尉が「後備」の備頭なのでこの文書が加藤清正から発給されたと思われる。よって、ほかの「備」の備頭に対しては、それぞれ同様の文書が加藤清正から発給されたのであろう。なお、この文書にも宛所の記載はないが、その理由は公布したものだからであろう。ちなみに、慶長５年７月７日付で徳川家康が上杉討伐の時に出した軍法（中村孝也『徳川家康文書の研究』中巻、日本学術振興会、1958 年、501 ～ 502 頁）にも宛所の記載はない。また、慶長５年７月 17 日付で出された「内府ちかひの条々」（前掲・中村孝也『徳川家康文書の研究』中巻、514 ～ 516 頁）にも宛所の記載はない。その理由も同様に公布したものだからであろう。

【補論①】

上述したように、この陣立書には「忍之者」という記載があるが、慶長５年に比定できる加藤清正書状において、「伊賀しのひ之もの共」に関する記載があるので、以下に提示する。

この書状は『熊本県史料』中世篇第一（補注１）に収載されていて、同書ではこの書状について「天正十五年カ」と比定し、頭注では「秀吉九州征伐の折なるべし」としている。しかし、下線ｄに「如水」（＝黒田如水）と記されていて、黒田孝高が「如水軒」と号したのは文禄２年（1593）であるので（補注２）、豊臣秀吉の九州征討時のものではなく、内容的に見て慶長５年（黒田如水と加藤清正による薩摩〔島津氏〕への出陣予定〔その後中止〕）に比定できる。

追而ｅ伊賀しのひ之もの共、か様之刻、やくニも不立候者、不入ものニ候間、以後者扶持をはなし候ハん間、得其意可申付候、

急度申遣候、a其許方いつミへ百姓にても、しのひの者にても、矢を可付置事肝要候、b大略者可明退様ニ取沙汰候、於明退者、追懸十廿成共討捕候様ニ有度候、十左衛門兄弟にてのせかね候事候間、従下人付置候間、我ゝ非由断候なとゝ、以後身ひらき不仕様ニ心懸肝要候、c其元之普請随分可差急候、出来次第いつミへ可押出候、d如水先手も湯浦迄著陣候間、可得其意候、又先ゝ様子無相替儀候共、其通昼夜之無境可申越候、謹言、

十一月八日　　清正（花押）

加藤与左衛門尉殿

吉村左近とのへ

庄林隼人とのへ

下線aは「其許」（肥後国佐敷城ヵ）より「いつミ」（現鹿児島県出水（いずみ）郡）へ百姓か忍びの者を遣わして矢を付け置くこと（具体的な意味は不明）が肝要である、と指示している。

下線bは、（下線aの行動により出水の敵が）撤退するように仕向け、撤退すれば追いかけて10人～20人なりとも討ち取るように命じている。

下線cでは「其元」（佐敷城ヵ）での普請を急いでおこない、完成次第に「いつミ」へ出陣することを命じている。

下線dは、黒田如水の軍勢の先手が「湯浦」（現熊本県葦北郡芦北町湯浦）まで着陣したことを伝えている。

下線eは、伊賀の忍の者共が、こうした時に役に立たなかった場合は、以後は召し放ちにするとしている。

以上のことを総合すると、この書状の日付である11月8日の時点で、①黒田如水と加藤清正による島津攻めは中止されていない（実行予定である）、②黒田如水の軍勢の先手が「湯浦」まで着陣した（その後、出水への進軍を予定していたのか？）③加藤清正は家臣（佐敷城で普請中か？）に対して出水への出陣を命じた（つまり、この時点では出水まで到達していない）、④「其元」（佐敷城ヵ）から出水（つまり、敵国〔島津氏の領国〕領内）へ百姓、忍の者を先行して潜入させてなんらかの軍事活動（奇襲攻撃や破壊工作か？）をするように命じた、⑤伊賀の忍の者共（複数形になっている）がこの軍事活動に失敗した場合は召し放ちにする、としていることがわかる。

この書状内容からは、この戦いにおいて伊賀の忍の者共に、どのような役目が課されていたのかを具体的に知ることができる（補注3）。

なお、この伊賀の忍の者共の出水での軍事活動が実行されたのか、実行した場合、成功したのか、或いは、失敗したのか、については不明である。

【補論②】

「加藤平左衛門切米切符」（元和7年10月28日付）（補注4）には「忍之衆頭廿四人分」という記載（元和7年の時点で「忍之衆頭」が24人いたということか？或いは、「忍之衆頭」に渡す（忍之衆の）「廿四人分」という意味か？）がある。また、「忍之衆」の「与頭」（＝組頭）が「藤村与兵へ」（裏判〔花押〕を据えた人物）であることがわかる。

同様に、「加藤平左衛門切米切符」（元和8年11月20日付、寛永元年11月20日付）（補注5）からは、「忍衆」の「与頭」（＝組頭）が「圓山弥右衛門」（裏判〔花押〕を据えた人物）であることがわかる。

このように加藤家における元和 7 年、同 8 年、寛永元年の時点における「忍之衆」（或いは「忍衆」）の「与頭」（＝組頭）の名前がわかる、という意味で重要な文書である。

（補注 1）「阿部文書」（『熊本県史料』中世篇第一、熊本県、1961 年、1 号文書、393 ～ 394 頁）。

（補注 2）黒田孝高は「同年（引用者注：文禄 2 年）和議がなり、帰国後は剃髪して如水軒円清居士と号した」（『国史大辞典』4 巻、吉川弘文館、1984 年、971 ～ 972 頁、「黒田孝高（くろだよしたか）」の項、この項の執筆は柴多一雄氏）。

（補注 3）山田雄司編、三重大学国際忍者研究センター監修『忍者学大全』（東京大学出版会、2023 年）の「第 8 章合戦戦略と忍者」には、桐野作人「戦国島津氏の忍びについて－「いくさ忍び」の事例と特質」、岩田明広「戦国期関東の忍びと特殊武装集団」、山田雄司「島原・天草一揆と忍び」の各論考が収録されていて、合戦と忍びについて考察されているので参照されたい。

（補注 4）前掲『熊本県史料』中世篇第一（「阿部文書」26 号文書、407 ～ 408 頁）。

（補注 5）前掲『熊本県史料』中世篇第一（「阿部文書」28 号文書、29 号文書、408 ～ 409 頁）。

図１

「加藤清正備陣立表」（本稿では「肥後守陣立書」と略称）

二五四　加藤清正備陣立表　一通
（一三―二二）

品質・形状　紙本墨書・竪紙

法　量　（縦）四七・二cm（横）第一紙　三一・〇cm
二紙　三一・六cm
三紙　三一・八cm
四紙　三一・四cm
五紙　三二・〇cm
六紙　三一・八cm
七紙　三二・〇cm
八紙　三二・〇cm

釈　文

（端裏貼紙）
「肥後守様
本陣備へ人名人数表」

A

井上大九郎
長野吉兵衛
鉄炮三十人　出田宮内少
天野民部少
鉄炮百人　飯田覚兵衛　騎馬拾四騎
鉄炮九人

一番

并河志摩守　騎馬拾弐騎
庄林豊後守　騎馬弐拾騎
鉄炮百弐十人　三宅角左衛門尉
大木四郎
鉄炮五十人　井上少九郎
庄林隼人正
騎馬合五拾七騎
鉄炮合三百拾人　自身与力共

B

鉄炮弐十九人　梶原源太兵衛
神田修理
鉄炮四拾六人　新美八左衛門尉　騎馬拾騎
南條作十郎

二番

斎藤伊豆守　騎馬拾騎
鉄炮弐十人　森本儀太夫　同　九騎
同　三十人　小代下総守　同　壱騎
同　四十人　相田内匠　同　六騎
同　四十人　魚住彦兵衛　同　九騎
同　三十人　近藤与右衛門尉
騎馬合五拾五騎
鉄炮合弐百三拾五人　自身与力共

C

木造右京
鉄炮弐十人　佐々備前守
武藤内膳
粟屋平右衛門尉
生駒式部少

三番　下川又左衛門尉　騎馬拾三騎
成田弥兵衛
平野角太夫　騎馬　九騎
鉄炮三十人　小野作兵衛
鉄炮四十人　貴田玄蕃
騎馬合三拾弐騎
鉄炮合九拾人　自身与力共

D

鉄炮三十人　水谷甚右衛門尉
同　弐十人　奥村久馬介
同　弐十人　大脇助太夫
同　弐十人　杉山清左衛門尉
同　弐十人　佃　源太夫
弓　三十人　柳田勘右衛門尉
鉄炮廿九人　加恵九左衛門尉
同　四十人　谷崎権太夫
同　五十人　坂川忠兵衛
同　四十人　池内左太右衛門尉
内弓弐十人
同　弐十五人　嘉悦小平次
同　弐十人　伊藤四良右衛門尉
同　弐十四人　芳賀五右衛門尉
同　弐十人　天野大蔵
同　弐十人　牧　頼母佐
同　弐十人　大塚七右衛門尉

E

捽箱奉行	堀江忠兵衛	使番
鑓奉行	（谷崎伊織 松下勘兵衛	同 同
鉄炮弐拾人昇奉行	山田太良右衛門尉	同 同 同 母衣
鉄炮弐拾人昇奉行	岡　為兵衛	同 同 同
甲奉行	（杉村弥三兵衛 野間勘丞	同 同 同
捽箱奉行	土方金左衛門尉	同 同 使番 同 同 同 同 同 同

F

山岸久右衛門尉
奥村数馬介
杉村文太夫
近藤七良兵衛
保丶勘五右衛門尉
柴村右近右衛門
蟹江七太夫
河原九良兵衛
服部次良左衛門尉
嘉悦平馬
寺井小七郎
下野藤八
飯田孫左衛門尉
水野左膳
保丶清太夫
栗生甚兵衛
下川平吉
福田弥五左衛門尉
入江久兵衛
堀田安右衛門尉
佐藤助太夫
横地助之丞
林安太夫

G

同　吉村次太夫与　馬拾九騎
同　荒川市左衛門与　馬拾九騎
同　保々因幡与　馬弐十壱騎
同　杉村弥三兵衛与　馬拾七騎
同　谷崎伊織与　馬廿弐騎
手廻　栗生市良右衛門与　馬拾八騎
同　梶原喜平次与　馬廿七騎
同　松下弥平次与　馬廿四騎
大小性　長尾権佐与　馬弐拾壱騎
小々性　蟹江主膳与　馬三拾七騎

肥後守

小々性　捧庵
（加藤平左衛門与　馬十騎
久米半丞与　鉄炮三十人　馬三十八騎）
大小性　相田六左衛門与　馬弐十九騎
同　中川平九良与　馬弐十五騎
同　久米彦之丞与　馬弐拾九騎
手廻　竹田善兵衛与　馬拾七騎
同　佐野弥五右衛門与　馬弐十騎
同　嶋田文右衛門与　馬弐十壱騎
同　山田太郎右衛門与　馬十八騎
同　并河左近右衛門与　馬拾九騎
同　岩越惣右衛門与　馬弐十騎

GⅡ

騎馬合百六拾壱騎　大小性六組
同　合八拾六騎　小々性弐組
同　合弐百三拾七騎　手廻十弐組
三口騎馬合四百七拾九騎
鉄炮合四百七拾八人
弓合五拾人

H

加藤与左衛門尉　鉄炮三拾人　騎馬弐拾四騎

加藤右馬允　鉄炮三拾八人　騎馬百八騎

I

与迦

加藤越後守　騎馬拾六騎

中村権八　騎馬　六騎

長尾左衛門尉

木下平三良

吉弘加兵衛

野尻久左衛門尉

田寺久五良　騎馬弐拾騎

鎌田儀左衛門尉

福嶋豊前守

伊藤平楽寺

田中左兵衛

柴田半左衛門尉

佐〻平丞

多賀三良兵衛

J

鉄炮廿九人

前長野三良左衛門与力　頭七騎
前堤　権右衛門与力　頭弐騎
前三田村七兵衛与力　頭拾壱騎
前田寺久太夫与力　頭拾騎
前加藤丹後与力　頭拾弐騎
前津田兵部少与力　頭三騎
前大脇次良左衛門預り（弓歟 鉄炮三拾六人）
前毛利勘左衛門預り　同弐拾五人
前中川寿林預り　同拾三人
前中村将監預り　同四拾八人

鉄炮弐拾人（佐藤孫右衛門尉 奥井与三左衛門尉）

同百八拾五人　新座与
定番鉄炮百人　美濃部喜兵衛
同百人　四宮藤五郎
頭三拾人　忍之者

K

一紙

騎馬合八百四拾騎
鉄炮合千六百七拾弐人
弓合八拾六人
外歩侍九拾七人

騎馬合弐百十七騎　右馬允 与左衛門尉　自身与力共
鉄炮合五百八拾九人
弓合三拾六人
忍之者三拾三人
外ニ歩侍九拾七人

※『松井文庫所蔵古文書調査報告書』2（254号文書、52～58頁）より引用した。

※図1では「肥後守陣立書」の内容を便宜上、A～Kに分類して、A～Kの文字を右側に記載した。

表１

分限帳Ａ（元和８年）	分限帳Ｂ	分限帳Ｃ（元和８年）	分限帳Ｄ（元和前期ヵ）	分限帳Ｅ
一番	馬廻組ヵ（12 組）	馬廻組ヵ（12 組）	一番	一番
二番	大小姓組（6 組）	大小姓組（8 組）（注 2）	二番	二番
三番			三番	三番
組迦（注 1）	小々姓組（2 組）	組不入分	城代など重臣（大身クラス）	組迦
馬廻小姓組（20 組）	御外様衆	一番手	馬廻組（注 3）（15 組）	馬廻小姓組（20 組）
組に不入分	一番手	二番手	大小姓組（2 組）	組ニ不入分
かち小生	二番手	三番手		
	三番手	後備		
	後備	組迦		
	備迦	歩小姓		
	組迦			

※分限帳Ａ～分限帳Ｅの書誌情報については、本文を参照されたい。

（注 1）「組迦」は「くみはずし」と読むと考えられる。

（注 2）分限帳Ｂにおける「小々姓組」2 組の記載について、朱線で抹消（見せけち）しているので、大小姓組が 8 組ということになる。

（注 3）15 組のうち、明組（組頭がいない組）が 3 組ある。

表 2

「加藤清正備陣立表」（『松井文庫所蔵古文書調査報告書』2、254 号文書、本稿では「肥後守陣立書」と略称）と分限帳Ａ、分限帳Ｂとの比較対照表

【凡例】分限帳Ａ＝「加藤家御侍帳」、分限帳Ｂ＝「加藤侯分限帳」、★…分限帳Ｂにおける朱書（＝分限帳Ｃを示す）、■…一番～三番の備頭、◆…肥後守

※表 2 は「肥後守陣立書」の記載と分限帳Ａ、分限帳Ｂの記載を比較対照するために作成した。

※分限帳Ａ～分限帳Ｃの書誌情報については、本文を参照されたい。

※Ａ～Ｋの分類については図 1 に準拠する。

Ａ

【一番】			分限帳Ａ	分限帳Ｂ（注 1）
井上大九郎			383 石 4 斗 一番	380 石 一番手 150 人扶持★ 鉄炮之者 50 人★
長野吉兵衛			1000 石 一番	1000 石 一番手
出田宮内少	鉄炮 30 人		2000 石 94 人扶持 鉄砲 31 人 一番	2000 石 一番手 94 人扶持 御鉄炮衆 31 人分
天野民部少			3049 石 2 斗 7 升 一番	3050 石 一番手
飯田覚兵衛	鉄炮 100 人	騎馬 14 騎	4506 石 1 斗 2 升 一番 300 人扶持 鉄砲之者 100 人 騎馬 14 人	4500 石 一番手 知行高与力合 2660 石 騎馬 14 人 300 人扶持 鉄炮衆 100 人分
■并河志摩守	鉄炮 9 人	騎馬 12 騎	1 万 297 石 9 斗 8 升 一番 騎馬 12 人 27 人扶持 鉄砲之者 9 人	1 万 300 石 一番手 騎馬 12 人
庄林豊後守		騎馬 20 騎	5527 石 3 斗 7 升 一番 騎馬 20 人	5530 石 一番手 騎馬 20 人
三宅角左衛門尉	鉄炮 120 人		3674 石 6 斗 5 升 360 人扶持 鉄砲者 120 人 一番	3670 石 一番手 360 人扶持 鉄炮衆 120 人分

大木四郎			3674 石 6 斗 5 升 一番	3475 石 一番手
井上少九郎	鉄炮 50 人		733 石 8 斗 7 升 150 人扶持 鉄砲之者 50 人 一番	730 石 一番手
庄林隼人正			1382 石 3 斗 8 升 一番	1380 石 一番手
自身与力共	騎馬合 57 騎 鉄炮合 310 人（ママ）（309 人ヵ）			

B

【二番】

梶原源太兵衛	鉄炮 29 人		1818 石 7 升 二番 87 人扶持 鉄砲之者 29 人	1818 石 二番手 90 人扶持 鉄炮之者 30 人★
神田修理			4061 石 7 升 二番	4601 石 二番手 神田対馬と記載
新美八左衛門尉	鉄炮 46 人	騎馬 10 騎	2736 石 6 斗 9 升 二番 騎馬 10 人 138 人扶持 鉄砲之者 46 人	2736 石 二番手 騎馬 10 人 138 人扶持 鉄炮衆 46 人分
南條作十郎			6075 石 4 升 二番	6075 石 二番手 南條若狭と記載
■斎藤伊豆守		騎馬 10 騎	5020 石 7 升 二番 騎馬 10 人	5020 石 二番手 騎馬 10 人
森本儀太夫	鉄炮 20 人	騎馬 9 騎	5126 石 3 斗 二番 騎馬 9 人 60 人扶持 鉄砲之者 20 人	5126 石 軍用 6000 石余 60 人扶持 御鉄炮衆 20 人分 87 人扶持★ 鉄炮之者 29 人★ 騎馬 9 人

小代下総守	鉄炮 30 人	騎馬 1 騎	4135 石 5 斗 3 升 二番 自分与力共に騎馬一人、合 4383 石 8 斗 9 合 90 人扶持 鉄砲之者 30 人	4135 石 二番手 騎馬 1 人★
相田内匠	鉄炮 40 人	騎馬 6 騎	3610 石 1 斗 4 升 二番 騎馬 6 人 120 人扶持 鉄砲之者 40 人	3610 石 二番手 騎馬 6 人 120 人扶持 鉄炮衆 40 人
魚住彦兵衛	鉄炮 40 人	騎馬 9 騎	1000 石 二番 騎馬 9 人 120 人扶持 鉄砲之者 40 人	1000 石 魚住喜兵衛として記載 二番手 騎馬 9 人 120 人扶持 鉄炮衆 40 人
近藤与右衛門尉	鉄炮 30 人		1000 石 二番 93 人扶持 鉄砲之者 30 人	1000 石 二番手
自身与力共	騎馬合 55 騎 鉄炮合 235 人			

C

【三番】

木造右京			1005 石 5 斗 3 升 三番	1005 石 三番手
佐々備前守	鉄炮 20 人		1101 石 5 斗 三番 60 人扶持 鉄砲之者 20 人	1101 石 三番手 60 人扶持 鉄炮衆 20 人分
武藤内膳			2002 石 1 斗 2 升 三番	2002 石 三番手
粟屋平右衛門尉			2016 石 3 斗 3 升 三番	2016 石 三番手 栗屋平右衛門と記載
生駒式部少			3003 石 2 斗 三番	3003 石 三番手

■下川又左衛門尉		騎馬 13 騎	1 万 11 石 7 斗 1 升 三番 騎馬 13 人	1 万 11 石 三番手 騎馬 13 人
成田弥兵衛			3227 石 7 斗 9 升 三番	3227 石 三番手
平野角太夫		騎馬 9 騎	1733 石 3 升 三番 騎馬 9 人	1730 石 三番手 騎馬 13 人
小野作兵衛	鉄炮 30 人		1600 石 90 人扶持 鉄砲之者 30 人 三番	1600 石 90 人扶持★ 鉄炮之者 30 人★ 三番手
貴田玄蕃	鉄炮 40 人		977 石 5 斗 120 人扶持 鉄砲之者 40 人 三番	1471 石 120 人扶持★ 鉄炮之者 40 人★ 三番手
自身与力共	騎馬合 32 騎 鉄炮合 90 人			

D

水谷甚右衛門尉	鉄炮 30 人	記載なし	記載なし
奥村久馬介	鉄炮 20 人	513 石 8 斗 5 升 1 合 馬廻小性組 梶原喜平次組 60 人扶持 鉄砲之者 20 人	514 石 大小姓組 加藤主馬組 梶原喜平次組★ 60 人扶持 御鉄炮衆 20 人分 奥村久米之助と記載
大脇助太夫	鉄炮 20 人	471 石 3 斗 8 升 2 合 馬廻小性組 吉村次太夫組 60 人扶持 鉄砲之者 20 人	472 石 馬廻組 中村将監組 吉村次太夫組★ 60 人扶持 御鉄炮衆 20 人分
杉山清左衛門尉	鉄炮 20 人	784 石 2 斗 3 升 馬廻小性組 荒川市左衛門組	1084 石 馬廻組 荒川市左衛門組 60 人扶持 御鉄炮衆 20 人分

佃源太夫	鉄炮 20 人	510 石 細源太夫と記載 馬廻小性組 嶋田助右衛門組	510 石 馬廻組 嶋田助右衛門組
柳田勘右衛門尉	弓 30 人	629 石 3 斗 2 升 4 合 馬廻小性組 長尾権之助組 柳田勘右衛門組 90 人扶持 弓之者 30 人	629 石 90 人扶持 御鉄炮衆 30 人分 弓のもの★ 大小姓組 長尾権之助組
加恵九左衛門尉	鉄炮 29 人	402 石 馬廻小性組 山田太郎右衛門組 嘉恵九左衛門と記載	700 石 馬廻組 山田太郎右衛門組 嘉恵九左衛門と記載
谷崎権太夫	鉄炮 40 人	565 石 馬廻小性組 谷崎伊織組	565 石★ 馬廻組 谷崎伊織組★ 120 人扶持★ 鉄炮之者 40 人★ 1500 石 120 人扶持 御鉄炮衆 40 人 二番手
坂川忠兵衛	鉄炮 50 人	1408 石 3 斗 5 合 馬廻小性組 杉村弥三兵衛組	1408 石 150 人扶持 御鉄炮衆 50 人分 馬廻組 杉村弥三兵衛組 坂崎忠兵衛と記載
池内左太右衛門尉	鉄炮 40 人 内 弓 20 人	720 石 馬廻小性組 杉村弥三兵衛組	1300 石 馬廻組 杉村弥三兵衛組 池田左太右衛門と記載
嘉悦小平次	鉄炮 25 人	461 石 2 斗 馬廻小性組 松下弥平次組	461 石 大小姓組 松下弥平次組 70 人扶持 御鉄炮者 25 人分
伊藤四良右衛門尉	鉄炮 20 人	500 石 馬廻小性組 谷崎伊織組 伊藤四郎右衛門と記載	500 石 馬廻組 柴原将監組 谷崎伊織組★ 60 人扶持 御鉄炮衆 20 人分

芳賀五右衛門尉	鉄炮 24 人	500 石 馬廻小性組 粟生一郎右衛門組 72 人扶持 鉄砲之者 24 人	500 石 馬廻組 榎津加賀右衛門組 72 人扶持 御鉄炮衆 24 人 芳賀五左衛門と記載
天野大蔵	鉄炮 20 人	1000 石 馬廻小性組 久米彦之允組 60 人扶持 鉄砲之者 20 人	1000 石 大小姓組 蒔田右京組 久米彦之允組★ 60 人扶持 御鉄炮衆 20 人分
牧頼母佐	鉄炮 20 人	550 石 3 斗 馬廻小性組 島田助右衛門組	550 石 馬廻組 嶋田助右衛門組 60 人扶持★ 鉄炮者 20 人★
大塚七右衛門尉	鉄炮 20 人	250 石 馬廻小性組 荒川市左衛門組	250 石 馬廻組 荒川市左衛門組

E

堀江忠兵衛	捽箱奉行	230 石 2 斗 9 升 馬廻小性組 杉村弥三兵衛組	236 石 馬廻組 杉村弥三兵衛組
谷崎伊織	鑓奉行	324 石 4 斗 6 升 馬廻小姓組 谷崎伊織組組頭	324 石 4 斗 6 升★ 馬廻組 谷崎伊織組組頭★
松下勘兵衛	鑓奉行	200 石 馬廻小性組 粟生一郎右衛門組	200 石 馬廻組 粟生市左衛門組★
山田太良右衛門尉	鉄炮 20 人　昇奉行	532 石 4 升 馬廻小姓組 山田太郎右衛門組組頭	535 石 馬廻組 山田太郎右衛門組組頭 60 人扶持 御鉄炮者 20 人分
岡為兵衛	鉄炮 20 人　昇奉行	250 石 馬廻小性組 谷崎伊織組 岡伊兵衛と記載	250 石 60 人扶持★ 鉄炮之者 20 人★ 馬廻組 柴原将監組 谷崎伊織組★ 岡伊兵衛と記載

杉村弥三兵衛	甲奉行	414 石 2 斗 馬廻小性組 杉村弥三兵衛組組頭 110 人扶持 鉄砲之者 40 人	414 石 馬廻組 杉村弥三兵衛組組頭
野間勘丞	甲奉行	310 石 4 斗 8 升 3 合 馬廻小性組 荒川市左衛門組	310 石 馬廻組 荒川市左衛門組 野間勘之允と記載
土方金左衛門尉	捽箱奉行	278 石 9 斗 8 合 馬廻小性組 并川左近右衛門組	579 石 馬廻組 並河左近右衛門組 土方金右衛門と記載

F

山岸久右衛門尉	使番	160 石 馬廻小性組 久米彦之允組	160 石 大小姓組 蒔田右京組 久米彦之允組★
奥村数馬介	使番	270 石 馬廻小性組 長尾権之助組 奥村数馬と記載	270 石 大小姓組 長尾権之助組 奥村数馬と記載
杉村文太夫	使番	180 石 馬廻小性組 長尾権之助組	600 石 大小姓組 長尾権之助組
近藤七良兵衛	使番	209 石 6 斗 9 升 1 合 馬廻小性組 中川平九郎組 近藤七郎兵衛と記載	610 石 大小姓組 中川平九郎組 近藤七郎兵衛と記載
保々勘五右衛門尉	使番	300 石 馬廻小性組 保々因幡組 保々勘五左衛門と記載	300 石 馬廻組 保々因幡組 保々勘五左衛門と記載
柴村右近右衛門	使番	327 石 馬廻小性組 久米彦之允組	321 石 大小姓組 蒔田右京組 久米彦之允組★ 柴村右衛門と記載
蟹江七太夫	使番	500 石 馬廻小性組 松下弥平次組	500 石 大小姓組 松下弥平次組

河原九良兵衛	母衣	381石1斗7升3合 馬廻小性組 山田太郎右衛門組 河原九郎兵衛と記載	381石 馬廻組 山田太郎右衛門組 河原九郎兵衛と記載
服部次良左衛門尉	母衣	330石3斗3升1合 馬廻小性組 久米彦之允組 服部二郎左衛門と記載	330石 大小姓組 蒔田右京組 久米彦之允組★ 服部次郎左衛門と記載
嘉悦平馬	母衣	587石7斗 馬廻小性組 長尾権之助組	1088石 大小姓組 長尾権之助組
寺井小七郎	母衣	736石1斗7升5合 馬廻小性組 長尾権之助組	736石 大小姓組 長尾権之助組
下野藤八	母衣	510石7斗7升9合 馬廻小性組 松下弥平次組	511石 大小姓組 松下弥平次組
飯田孫左衛門尉	母衣	380石 馬廻小性組 相田六左衛門組	378石 大小姓組 相田六左衛門組
水野左膳	母衣	600石 馬廻小性組 中川平九郎組	600石 大小姓組 中川平九郎組
保々清太夫	母衣	500石 馬廻小性組 梶原喜平次組	500石 大小姓組 加藤主馬組 梶原喜平次組★
粟生甚兵衛	母衣	355石2斗2升 馬廻小性組 松下弥平次組	655石 大小姓組 松下弥平次組 西生甚兵衛と記載
下川平吉	使番	498石 馬廻小性組 長尾権之助組	498石 大小姓組 長尾権之助組
福田弥五左衛門尉	使番	400石5斗3升 馬廻小性組 粟生一郎右衛門組 鎌田弥五左衛門と記載	400石 馬廻組 榎津加賀右衛門組 粟生市左衛門組★ 鎌田弥五左衛門と記載

入江久兵衛	使番	200 石 馬廻小性組 山田太郎右衛門組	200 石 馬廻組 山田太郎右衛門組
堀田安右衛門尉	使番	200 石 馬廻小性組 吉村次太夫組	200 石 馬廻組 中村将監組 吉村次太夫組★
佐藤助太夫	使番	370 石 2 斗 1 升 馬廻小性組 山田太郎右衛門組	370 石 馬廻組 山田太郎右衛門組
横地助之丞	使番	246 石 馬廻小性組 島田助右衛門組 横地助丞と記載	246 石 馬廻組 嶋田助右衛門組 横地助之允と記載
林安太夫	使番	337 石 7 斗 5 升 2 合 馬廻小性組 島田助右衛門組	337 石 7 斗 5 升 2 合★ 馬廻組 島田助右衛門組

G

【加藤肥後守の本陣】

吉村次太夫与	手廻（ママ）（馬廻ヵ）	馬 19 騎 （注 2）	421 石 4 斗 組頭 馬廻小性組	421 石 4 斗★ 組頭★ 馬廻組
荒川市左衛門与	手廻（ママ）（馬廻ヵ）	馬 19 騎	495 石 組頭 馬廻小性組	490 石 組頭 馬廻組
保々因幡与	手廻（ママ）（馬廻ヵ）	馬 21 騎	784 石 組頭 馬廻小性組	784 石 組頭 馬廻組
杉村弥三兵衛与	手廻（ママ）（馬廻ヵ）	馬 17 騎	414 石 2 斗 組頭 馬廻小性組	414 石 組頭 馬廻組
谷崎伊織与	手廻（ママ）（馬廻ヵ）	馬 22 騎	324 石 4 斗 6 升 組頭 馬廻小性組	324 石 4 斗 6 升★ 組頭★ 馬廻組
栗生市良右衛門与	手廻（ママ）（馬廻ヵ）	馬 18 騎	880 石 組頭 馬廻小性組 粟生一郎右衛門と記載	880 石★ 組頭★ 馬廻組 粟生一郎右衛門と記載★ 組名は粟生市左衛門と記載★

梶原喜平次与	大小性	馬 27 騎	496 石 組頭 馬廻小性組	496 石★ 組頭★ 大小姓組
松下弥平次与	大小性	馬 24 騎	401 石 5 斗 6 升 5 合 組頭 馬廻小性組	402 石 組頭 大小姓組
長尾権佐与	大小性	馬 21 騎	808 石 7 斗 5 升 組頭 馬廻小性組 長尾権之助と記載	808 石 組頭 大小姓組 長尾権之助と記載
蟹江主膳与	小々性	馬 37 騎	1112 石 1 斗 8 升 5 合 組頭 馬廻小性組	2012 石 組頭 小々姓組
◆肥後守（＝加藤忠広）		捧庵（＝下津捧庵） （注 3）	2027 石 4 斗 9 升 組迦	2207 石 備迦
加藤平左衛門与	小々性	馬 10 騎 鉄炮 30 人	2639 石 2 斗 与力（騎馬）9 人 90 人扶持 鉄砲之者 30 人 組迦	2639 石 93 人扶持 鉄炮衆 31 人 騎馬 9 人★ 備迦
久米半丞与	小々性	馬 38 騎	710 石 6 斗 久米半允と記載 馬廻小性組 組頭	711 石 組頭 小々姓組 久米半之允と記載
相田六左衛門与	大小性	馬 29 騎	400 石 馬廻小性組 組頭	400 石 大小姓組 組頭 相田六右衛門と記載
中川平九良与	大小性	馬 25 騎	608 石 8 斗 馬廻小性組 組頭 中川平九郎と記載	609 石 大小姓組 組頭 中川平九郎と記載
久米彦之丞与	大小性	馬 29 騎	524 石 5 斗 3 升 馬廻小性組 組頭 久米彦之允と記載	524 石 5 斗 3 升★ 大小姓組★ 組頭★ 久米彦之允と記載★
竹田善兵衛与	手廻（ママ）（馬廻ヵ）	馬 17 騎	892 石 1 斗 7 升 馬廻小性組 組頭	892 石 馬廻組 組頭

佐野弥五右衛門与	手廻（ママ）（馬廻ヵ）	馬 20 騎	422 石 5 斗 馬廻小性組 組頭	423 石 馬廻組 組頭
嶋田文右衛門与	手廻（ママ）（馬廻ヵ）	馬 21 騎	538 石 5 斗 7 升 馬廻小性組 組頭 島田助右衛門と記載	539 石 馬廻組 組頭 島田助右衛門と記載
山田太郎右衛門与	手廻（ママ）（馬廻ヵ）	馬 18 騎	532 石 4 升 馬廻小性組 組頭	535 石 馬廻組 組頭
并河左近右衛門与	手廻（ママ）（馬廻ヵ）	馬 19 騎	300 石 馬廻小性組 組頭	300 石 馬廻組 組頭
岩越惣右衛門与	手廻（ママ）（馬廻ヵ）	馬 20 騎	993 石 7 斗 6 升 9 合 馬廻小性組 組頭	994 石 馬廻組 組頭

G Ⅱ

騎馬合 161 騎（ママ）（155 騎ヵ）…大小性 6 組
騎馬合 86 騎（ママ）（85 騎ヵ）…小々性 2 組
騎馬合 237 騎（ママ）（231 騎ヵ）…手廻（ママ）（馬廻ヵ）12 組
三口騎馬合 479 騎（ママ）（471 騎ヵ）（注 4）
鉄炮合 478 人（ママ）（448 人ヵ）（注 5）
弓合 50 人（注 6）

H

加藤与左衛門尉	鉄炮 30 人	騎馬 24 騎	6722 石 7 斗 4 升 組迦 騎馬 24 人 扶持方 95 人扶持 鉄砲之者 61 人	6721 石 備迦 騎馬 24 人 90 人扶持 鉄炮衆 30 人分
加藤右馬允	鉄炮 38 人	騎馬 108 騎	2 万 16 石 7 斗 5 升 組迦 騎馬 108 人 扶持方 114 人扶持 鉄砲之者 38 人	2 万 16 石 備迦 騎馬 108 人 140 人扶持 鉄炮衆 38 人分

I

【与迦（＝くみはずし）】

加藤越後守	騎馬 16 騎		3385 石 1 斗 5 升 騎馬 15 人 組迦	3385 石 騎馬 15 人★ 後備

中村権八	騎馬 6 騎		1932 石 1 斗 5 升 騎馬 5 人 組迦	1932 石 1 斗 5 升★ 騎馬 5 人★ 後備
長尾左衛門尉			1500 石 組迦	1500 石 後備 長尾左右衛門と記載
木下平三良			1486 石 9 斗 9 升 組迦 木下平三郎と記載	1500 石 小々姓組 久米半之允組 木下平三郎と記載 1486 石 9 斗 9 升★ 後備 木下平三郎と記載
吉弘加兵衛			1152 石 4 斗 6 升 8 合 組迦	1152 石 4 斗 6 升 8 合★ 後備 吉廣加兵衛と記載★ 1152 石 後備
野尻久左衛門尉			1148 石 1 斗 9 升 5 合 組迦	1148 石 1 斗 9 升 5 合★ 後備
田寺久五良	騎馬 20 騎		976 石 6 斗 組迦 田寺久五郎と記載	976 石 後備 田寺久五郎と記載
鎌田儀左衛門尉			3200 石 7 斗 3 升 組迦	3002 石 二番手 3200 石 7 斗 3 升★ 後備
福嶋豊前守			2000 石 組迦	2000 石★ 後備
伊藤平楽寺			2010 石 5 斗 6 升 組迦	2010 石 5 斗 6 升★ 後備
田中左兵衛			1987 石 7 斗 7 升 組迦	1987 石★ 後備 1987 石 後備
柴田半左衛門尉			1508 石 2 升 組迦	1508 石 2 斗★ 後備

佐々平丞			1263 石 2 斗 2 升 組迦 佐々平允と記載	1263 石 2 斗 2 升★ 後備 佐々平之允と記載★
多賀三良兵衛			3000 石 組迦 多賀三郎兵衛と記載	3000 石 一番手 多賀三郎兵衛と記載 3000 石★ 後備 多賀三郎兵衛と記載★

J

前・長野三良左衛門与力	鉄炮 29 人　頭 7 騎	騎馬 7 人 87 人扶持 鉄砲之者 29 人	記載なし
前・堤権右衛門与力	頭 2 騎	（騎馬 2 人脱ヵ）	記載なし
前・三田村七兵衛与力	頭 11 騎	1210 石 9 斗 7 升 1 合 馬廻小性組 久米半丞組 騎馬 11 人 前･三田村七造与（力脱ヵ）と記載	1211 石 小々姓組 久米半之允組
前・田寺久太夫与力	頭 10 騎	500 石 田寺久太夫後家 組に不入分 騎馬 7 人 前･田寺久太夫与（力脱ヵ）と記載	500 石 田寺久太夫後家 御外様衆
前・加藤丹後与力	頭 12 騎	騎馬 12 人 外に 120 人扶持 かちの者 46 人 前･丹後与（力脱ヵ）と記載	記載なし
前・津田兵部少与力	頭 3 騎	騎馬 3 人 前・津田兵部与（力脱ヵ）と記載	記載なし
前・大脇次良左衛門預り	弓歟鉄炮 36 人	108 人扶持 鉄砲之者 36 人 前・大脇二郎左衛門与（力脱ヵ）と記載	108 人扶持 鉄炮衆 36 人 前・大脇次郎右衛門与と記載★

前・毛利勘左衛門預り	鉄炮 25 人	75 人扶持 鉄砲之者 25 人 前・毛利勘左衛門与（力脱ヵ）と記載	75 人扶持 鉄炮衆 25 人分 勘左衛門与と記載
前・中川寿林預り	鉄炮 13 人	39 人扶持 鉄砲之者 13 人 前・中川寿林あづかりと記載	39 人扶持 鉄炮衆 13 人分 前・寿林預 前・中川寿林預★
前・中村将監預り	鉄炮 48 人	146 人扶持 鉄砲之者 48 人 前・中村将監預りと記載	992 石 組頭 146 人扶持 鉄炮衆 19 人分 前・将監預 前・中村将監預★
佐藤孫右衛門尉	鉄炮 20 人	230 石 4 斗 3 升 馬廻小性組 粟生一郎右衛門組 佐東孫右衛門と記載	230 石 榎津加賀右衛門組 粟生市左衛門組★ 60 人扶持 御鉄炮衆 20 人分
奥井与三左衛門尉		320 石 8 升 2 合 馬廻小性組 山田太郎右衛門組	記載なし
新座（ママ）（新参ヵ）与	鉄炮 185 人	555 人扶持 新参与 鉄砲之者 185 人	555 人扶持 新衆迄 鉄炮衆 185 人分
美濃部喜兵衛	定番鉄炮 100 人	182 石 5 斗 72 人扶持 鉄砲之者 24 人 馬廻小性組 粟生一郎右衛門組 200 人扶持 鉄砲之者 100 人 美部喜兵衛与と記載	183 石 榎津加賀右衛門組 粟生市左衛門組★ 200 人扶持 鉄炮衆 100 人分 美濃部喜兵衛組★
四宮藤五郎	定番鉄炮 100 人	213 石 4 斗 8 升 3 合 馬廻小性組 山田太郎右衛門組 200 人扶持 鉄砲之者 100 人 四宮藤五郎与と記載	213 石 山田太郎右衛門組 200 人扶持 四宮藤五郎組★ 鉄炮衆 100 人分
忍之者	頭 30 人	99 人扶持 忍の者 33 人	90 人扶持 忍衆 30 人分 99 人扶持★ 忍衆 33 人分★

K

一紙（注 7）
騎馬合 840 騎（注 8） 鉄炮合 1672 人（注 9） 弓合 86 人（注 10） 　外（に）歩侍 97 人（注 11）
騎馬合 217 騎（注 12） └ （加藤）右馬允（の）自身与力共 └ （加藤）与左衛門尉（の）自身与力共
鉄炮合 589 人（注 13） 弓合 36 人（注 14） 忍之者 33 人（注 15） 　外に歩侍 97 人（注 16）

※「肥後守陣立書」には「鑓奉行」以外、「鑓」についての記載が全くない点に注意したい。

（注 1）分限帳Ｂにおいて、柴原将監組（朱書では谷崎伊織組）～嶋田助右衛門組までは組の分類が記されていないが、以下では馬廻組として分類した。

（注 2）「馬」とは「騎馬」という意味と考えられる。

（注 3）（下津）捧庵は肥後守の直下に独立して記載されているので右筆であると考えられる。

（注 4）Ｇの合計と考えられる。

（注 5）Ｄ～Ｇの合計と考えられる。

（注 6）Ｄ～Ｇの合計と考えられる。

（注 7）「一紙」とは別紙という意味であろうか。

（注 8）Ａ～Ｊの合計値のように見えるが、実際には数値は一致しない（表 3 参照）。

（注 9）Ａ～Ｊの合計値のように見えるが、実際には数値は一致しない（表 3 参照）。

（注 10）Ａ～Ｊの合計値のように見えるが、実際には数値は一致しない（表 3 参照）。鉄炮の人数と比較して弓の人数が圧倒的に少ない点に注意したい。

（注 11）「歩侍」（かちざむらい）は「肥後守陣立書」において、この箇所ではじめて出てくる記載である。よって、Ａ～Ｊの合計値？とは別に「歩侍」の人数を記載したと考えられる。

（注 12）Ｈに加藤右馬允と加藤与左衛門尉の「自身与力共」を加算した騎馬数と考えられる。Ｈの騎馬数の合計は 132 騎であるので（表 3 参照）、騎馬の合計 217 騎から差し引くと 85 騎になる。よって、加藤右馬允と加藤与左衛門尉の「自身与力共」の合計は 85 騎ということになる。

（注 13）Ｊの合計値のように見えるが、実際には数値は一致しない（表 3 参照）。

（注 14）Ｊの合計値のように見えるが、実際には数値は一致しない（表 3 参照）。ただし、Ｊでは「弓歟鉄炮」36 人と記載されているので、36 人をすべて「弓」とすれば弓の合計 36 人と一致する。しかし、本稿では、この 36 人は鉄炮の人数としてカウントした。

（注 15）Ｊの合計値のように見えるが、Ｊでは「忍之者」は「頭」30 人であり、Ｋでは「忍之者」33 人であるので、人数は一致しない（表 3 参照）。この人数の違いは、Ｋでは「忍之者」について「頭」という記載がない点と関係するのかもしれない。

（注 16）上述したＪの合計値？とは別に「歩侍」の人数を記載したと考えられる。よって、上述したＡ～Ｊの合計値？に加算した「歩侍」97 人（注 11）と、このＪの合計値？に加算した「歩侍」97 人は、同じ「歩侍」97 人である可能性が考えられる。

表３

「肥後守陣立書」における各数値の集計

	騎馬	鉄炮	弓	忍之者	歩侍	備　考	
A	57	310				一番→鉄炮隊＋騎馬隊の混成部隊	先備
B	55	235				二番→鉄炮隊＋騎馬隊の混成部隊	先備
C	32	90				三番→鉄炮隊＋騎馬隊の混成部隊	先備
D		378	50			鉄炮隊（一部、弓隊）	本陣
E		40				奉行グループ（昇奉行など）	本陣
F						母衣＋使番	本陣
G	471	30				本陣→騎馬隊（一部、鉄炮隊）	本陣
H	132	68				後備①→鉄炮隊＋騎馬隊の混成部隊	後備
I	42					後備②→騎馬隊	後備
J	45	556 （注１）		30		後備③→鉄炮隊＋騎馬隊の混成部隊＋忍之者	後備
合計	834	1707	50	30			

K	840	1672	86		97	A～Jの合計？に歩侍を加算
K	217					Hに自身与力共を加算
K		589	36	33	97	Jの合計？に歩侍を加算（注２）

GⅡ	155					大小性６組
GⅡ	85					小々性２組
GⅡ	231					手廻（ママ）（馬廻ヵ）12組
GⅡ	471					上記の合計
GⅡ		448	50			D～Gの合計

※A～Kの分類については図１に準拠する。

※上記の表における数値は実際の計算値を入れているので、「肥後守陣立書」における個々の合計値とは異なるケースもある。ただし、A～CとKは、「肥後守陣立書」における個々の記載値（合計値）をそのまま記入した。

（注１）Jでは「弓歟鉄炮」36人と記されているが、鉄炮36人として加算した（理由は本文の註（35）を参照）。

（注２）よって、上記のA～Jの合計？に加算した歩侍97人と、このJの合計？に加算した歩侍97人は、同じ歩侍97人である可能性が考えられる。

表４

馬廻組関係の諸組の比較

分限帳Ａ・分限帳Ｅ（注１）	分限帳Ｂ	分限帳Ｃ	分限帳Ｄ
▼馬廻小性組（20 組）	▼馬廻組（12 組）	▼馬廻組（12 組）	▼馬廻組（15 組）
谷崎伊織組	柴原将監組	谷崎伊織組	谷崎伊織佐組
粟生一郎右衛門組（注２）	榎津加賀右衛門組	粟生市左衛門組	明組（注９）
杉村弥三兵衛組（注３）	杉村弥三兵衛組	杉村弥三兵衛組	明組（注９）
保々因幡組	保々因幡組	保々因幡組	明組（注９）
荒川市左衛門組	荒川市左衛門組	荒川市左衛門組	栗生左門組
吉村次太夫組	中村将監組	吉村次太夫組	杉村弥三兵衛組
山田太郎右衛門組	山田太郎右衛門組	山田太郎右衛門組	保々因幡守組
并川左近右衛門組（注４）	並河左近右衛門組	並河左近右衛門組	荒川市左衛門組
岩越惣右衛門組	岩越惣右衛門組	岩越惣右衛門組	吉村次太夫組
竹田善兵衛組	竹田善兵衛組	竹田善兵衛組	山田太郎右衛門組
佐野弥五右衛門組	佐野弥五右衛門組	佐野弥五右衛門組	并河左近右衛門組
島田助右衛門組（注５）	嶋田助右衛門組	嶋田助右衛門組	岩越惣右衛門組
梶原喜平次組	▼大小姓組（６組）	▼大小姓組（８組）	竹田善兵衛組
久米彦之允組	加藤主馬組	梶原喜平次	佐野石見守組
長尾権之助組（注６）	蒔田右京組	久米彦之允	嶋田助右衛門組
松下弥平次組	長尾権之助組	長尾権之助組	▼大小姓組（２組）
中川平九郎組	松下弥平次組	松下弥平次組	梶原三左衛門組
相田六左衛門組	中川平九郎組	中川平九郎組	久米彦之丞組
蟹江主膳組（注７）	相田六左衛門組	相田六左衛門組	
久米半丞組（注８）	▼小々姓組（２組）	蟹江主膳組	
	蟹江主膳組	久米半之允組	
	久米半之允組		

※分限帳Ａ～分限帳Ｅの書誌情報については、本文を参照されたい。

（注１）分限帳Ａでは「馬廻小性組」、分限帳Ｅでは「馬廻小姓組」と記載している。

（注２）分限帳Ｅでは栗生一郎右衛門組としている。

（注３）分限帳Ｅでは松村弥三兵衛組としている。

（注４）分限帳Ｅでは並河左兵右衛門組としている。

（注５）分限帳Ｅでは嶋田助左衛門組としている。

（注６）分限帳Ｅでは長尾権助組としている。

（注７）分限帳Ｅでは蟹江主膳組としている。

（注８）分限帳Ｅでは久米半之允組としている。

（注９）「明組」とは組頭がいない組を指す。

表５

各分限帳の集計

分限帳Ａ（「加藤家御侍帳」）元和８年

	騎馬	鉄砲之者	弓	かちの者	忍の者	
一番	57	310				
二番	50	235				
三番	32	90				
組迦	586	1968		130	33	
馬廻小性組		438	30			
かち小生				65		
合計	725	3041	30	195	33	→ 4024
	19.1%	80.1%	0.8%			

分限帳Ｂ（「加藤侯分限帳」）※朱筆による訂正・加筆は除く。朱筆は元和８年。

	侍数	鉄炮之数	弓	歩衆	忍衆	
馬廻組ヵ	221	333				
大小姓組	163	95				
小々姓組	85					
		鉄炮之者				
御外様衆		468				
	騎馬	鉄炮衆				
一番手	57	311				
二番手	58	275				
三番手	32	90				
後備	8					
備迦	141	99		51		
組迦		478			30	
合計	765	2149		51	30	→ 2995
	26.3%	73.7%	0%			

分限帳Ｄ（「加藤清正侍帳」）

	騎馬	鉄炮	弓	歩行者（かち）	忍之者頭	
一番	57	300				
二番	38	165				
三番	32	90				
		鉄炮者				
組迦ヵ	520	1898		97	33	
馬廻組	225					
大小姓組	5					
合計	877	2453		97	33	→ 3460
	26.3%	73.7%	0%			

分限帳Ｅ（「加藤清正公家中附」）

	騎馬	鉄炮之者	足軽（注 2）	弓	歩之者（かち）	忍の者	
一番	50（注 1）		300（注 3）				
二番	44	206	30				
三番	22	90	90				
組迦	319	507			130	33	
馬廻小性組	371	404		30			
合計	806	1207	420	30	130	33	→ 2626
	39.5%	59.1%	1.5%				

※分限帳Ａ～分限帳Ｅの書誌情報については、本文を参照されたい。

（注 1）実際に計算して合計すると 45 人になる。

（注 2）鉄炮足軽のことか？

（注 3）実際に計算して合計すると、鉄炮之者 40 人＋足軽 100 人＝ 140 人になる。記載は、300 計人（ママ）となっている。

表 6

加藤清正軍役定（文禄 3 年 5 月 6 日付）（注 1）

100 人に付き	のぼり 5 本 鉄炮 10 挺 やり 10 本
50 人に付き	のぼり 2 本 鉄炮 5 挺 やり 5 本
50 人～ 100 人の間	のぼり 3 本 鉄炮は人数に応ずべし（注 2） ※やりの規定はない
40 人より下	のぼり 1 本 ※鉄炮、やりの規定はない
20 人より下	のぼりナシ やりは人数次第 ※鉄炮の規定はない
馬乗り（＝騎馬）	面々の人数に応じて、のぼりのあと見苦しくない程（＝程度に）召し置く（＝側に置く）べきこと（注 3）（注 4）

（注 1）『熊本史学』40 号（1 号文書）。

（注 2）鉄炮は 5 挺～ 10 挺の間ということか？

（注 3）騎馬はそれ自体が独立した兵科なので、鉄炮、やりなどの武器の携帯は必要ない（規定数は関係ない）ということか？

（注 4）史料の原文の「のほりのあと」は「のほりなと」の誤記か？